簡素な生活・高き想い　―森の生活

Plain Living and High Thinking　―Life in the Woods

上　岡　克　己
（人文学部英文教室）
Katsumi KAMIOKA
(Department of English, School of Humanities)

私が森に行ったのは、悠然と生き、人生の根本的事実にのみ直面し、できればその教えを学びたいためであり、いよいよ死ぬ時になって、自分が生きて来た証しが欲しかったからである。

ソロー　『森の生活』

プロローグ

最近のタイム誌（一九九二年二月一七日号）は、オゾン層の破壊が予想以上に進行し、もはや南極大陸の上空ばかりでなく、ロシア、スカンジナビア、ドイツ、イギリス、北米に広がっている事実を大大的に伝えている。もしこのままのペースで進行すれば、人類は太陽からの紫外線を直接浴びて、身体に重大な害を受けるばかりか、農業にも深刻な影響があると懸念されている。実際南極に近いチリのある町では、昼間子供を外出させず、サッカーの練習は夕方になってから始まる。ニュージーランドでは、外出時には帽子を被り、弁当は木陰で食べるように促されている。

こうした異常な事態に対拠するために、オゾン層破壊の元凶である冷蔵庫やクーラー、洗浄液に含まれるフロンを一九九五年までに全廃しようと国際的に決められた。しかし既に排出されたフロンは分解しにくいので今後一〇〇年間、オゾン層を破壊し続け、皮膚がんと白内障患者が急増することだろう。また代替フロンとして考えられているものが、オゾン層そのものは破壊しないものの、地球温暖化を促進させると考えられているので、手放しで喜べるものではない。なぜこんな状況に陥ったのか？

現在の地球規模の最も差し迫った深刻な環境問題が、オゾン層破壊にあったとしても、世界が抱える解決を迫られているのは、地球温暖化、酸性雨、大気汚染、海洋汚染など枚挙に暇がないほど山積している。もっとも地球温暖化により二一〇〇年には、東京が海の底に沈むという不吉な予測が報道されたとしても、今の世代には直接関係のないこととして、殆どの人が他人事のようにふるまっている。おそらく人類の英知が、それまでに解決してくれるであろう。テクノロジーには限りない未来の可能性があり、遺伝子工学や太陽熱発電の分野で、偉大な発見や発明があり、この窮地を救ってくれるだろうと甘い期待を抱いているのである。だが人類の英知とは、単にテクノロジーの進歩のみに限定してよいものだろうか。

問題はテクノロジーが解決できるかどうかではなく―それを待っている時間的余裕はない―今や地球的規模に拡大した破壊に対して、我々一人々が何ができるかなのである。『森の生活』を書いたソローの没後ちょ

うど一〇〇年目にあたる一九六二年、レイチェル・カーソンはがんを患いながらも『沈黙の春』を書き上げ、殺虫剤を初めとする農薬汚染に対して警告を発した。これを契機に、一企業、一地域による在来型の汚染はまがりなりにも減少した。日本においても水俣や四日市においてその汚染源が特定されれば、一定の改善が見られた。

だが現在の環境問題の深刻さは、その地球的規模にあり、かつては聖域だとされた南極大陸、アフリカのジャングルやブラジルの熱帯雨林もその影響から免れることはできない。かつてフランスの後期印象派画家ゴーギャンは、文明世界を逃れてタヒチ島に移り住んだが、このタヒチとて現在の地球的規模の環境汚染からは無縁ではありえない。そこの白砂の砂浜にも、日本や韓国から投棄された発泡スチロールが打ち寄せられている。自然保護と環境破壊を告発する『沈黙の春』が出版されて三〇年になるが、事態は一向に改善されていない。それどころかむしろ悪化のスピードが以前にもまして加速されている。その原因はただ一つ、私たち一人々が相変わらず今までのライフスタイルを続け、化石燃料を消費して耐えきれないほどの負担を地球にかけているということである。

一八世紀半ばの産業革命以降、特に第二次大戦後、私たち人類が歩んで来た生活活動そのものの累積は、地球のキャパシティーを遥かに越えてしまった。この状況を憂えても、日常のレベルで解決をはかろうとする動きは少ない。大多数の人々がこの事実を見て見ぬふりをし、相変わらず大量生産・大量消費というライフスタイルに執着する。経済成長やＧＮＰが無限に拡大するのが人類の幸福であるかのように考える人が多い。そのためより多くの物が必要になり、新幹線や高速道路、更にはリニアさえ必須になる。

『暮しの手帳』（一九九二年・第39号）は、リニアの問題を特集している。リニアの建設には自然破壊が伴い、運転には膨大なエネルギーを消費し、時代に逆行するシステムである。「スピードばかりを追いかける愚は止めてほしい。そして万に一つの不安が解決できないなら、リニアの開発は止める。それも人間のすばらしい英知なのだ」と語っているのは傾聴に値しよう。人類の英知とはこういうことなのだ。ソローは日記の中で「急がないという決心ほど人間に役立つものはない」と語っている。我々は走り続けて、止まることを知らないのである。

現在のような地球的規模の環境破壊の現状を見かねたマッキベンは、だれもが羨むニューヨーカー誌のスタッフ・ライターの地位を捨て、自らアディロンダックの山中に居を移して、不遜な現代文明を告発する。彼の著書『自然の終焉』（一九八九年）は、カーソンの『沈黙の春』と同じ方向を目指している。

今まで物質的豊かさに酔い痴れていた人々の中にも、地球的規模による環境の悪化から自らの生き方を疑問視し、新しいライフスタイルを追求する人々が現われてきた。それが環境問題を意識し、環境に優しい消費行動をとる「緑」の流れとなった。『地球を救う50のかんたんな方法』や『環境に優しい消費者』という書に、その実践的な方法が端的に示されている。

チャールズ・Ａ・ライクは『緑色革命』（一九七〇年）の中で、現代生活の中で見失ったもの、我々の人生から完全に消失した側面の一つに自然との関係―「農場や海辺や湖岸や牧場で自然と調和しながら生活し、自然を認識し、活用し、自然のふところに戻って行く経験―ソローの森の生活」―を挙げている。人はだれしもあり余る物の束縛から、効率性や画一性を余儀なくさせる複雑極まりない生活、都会の混沌や喧騒、はてしなく続く細分化された生活から、単なる物や手段としての自己から、かけがえのない本当の自己を求めて、羊を追う牧童のごとく一日を過したいと思う時がある。緑したたる牧草地、草を食む羊、こんもりと生い茂った森の彼方には雪をいただく山なみが見え、聞えて来るものと言えば、羊の鳴き声と近くを流れる小川のせせらぎだけである。このような田園風景や「大草原

の家」が多くの人々の郷愁をそそる。そこには私たちが煩雑な生活の中で見失った何かがあるはずである。最近の『セルボーン博物誌』や『ファーブル昆虫記』に対する関心の広がりは、いみじくも人間と自然との絆を回復したいという人々の素直な気持が反映されているように思われる。

それにしても現在のような高度物質文明の行き着く先はどこなのか？昨今の地球規模の破壊を知るにつけ、この疑問が脳裏から離れない。この時いつも思い出されるのは、アメリカの作家ヘンリー・デイヴィッド・ソローが暮した森の生活である。ソローは今から約一五〇年前、文明の只中でも原始的な生活をする価値があると考え、自宅から二キロメートル程離れた森の中の、ウォールデンという小さな湖のほとりに小屋を建て、「簡素な生活・高き想い」を実践した。それはできるだけ人工のものを排除した、自然の中での自給自足の生活を試みたもので、晴耕雨読という日本語にふさわしい生活であった。自然の中の人間の位置が問われ、新しいライフスタイルが探求されている今日、私たちが参考にすべき多くのものを含む生き方であった。

「森に行く」ということは、複雑さを逃れて単純を求める、人間本来の基本的な願望の象徴である。ソローが『森の生活』の中で、物質文明の進歩に浮かれている人々に向って、「待て、止まれ」と制止させ、万事にわたって「単純に、単純に、単純に」と叫ぶのは、森の生活が、まさしく人間を身動きのとれぬものにする人工の複雑性から逃れさせ、自然の中、閑暇と観照生活を通して本来の自己を回復させる場を提供するからである。

ソローの森の生活体験から、現代を生きる人々へのメッセージが書かれるに至った。「人は物をもてばもつほど一層貧乏になる。」「人はなしにすませるものの数に比例して豊かである。」「物は手に入れるよりも、それから免れる方が難しい。」「贅沢や慰みものは、人類の向上にとって不可欠でないばかりでなく、積極的な妨害物である。」「一つで十分である。」「我々はもっと簡素なもので満足することを知らず、もっとたくさん手に入れようと汲々としている。」「人はしばしば必要物の欠乏からではなく、贅沢品の欠乏から死ぬ。」

ソローは森の生活の中でたえず「生活に真に必要なものは何か」を問い直す。現代のエコロジー運動家もソローと同じ考えを述べている。「社会全体として、『我々は満足できる生活に本当に必要なものは何なのか』と問いかける必要がある。もしある物が、製造、建造、育成上生態系に取り返しのつかない被害を与えるのなら、その代替物をどうにかして創り出すことはできないのか、あるいは全くそれなしでやっていくことはできないのか。」

同じくエッセイストの高田宏も『物と心の履歴書』の中で、「五年前に家を建て替えた時、思いきって古い物を捨てた。物に執着する心を捨てる、という気であった……物に縛られて暮すのは嫌だ。……これからは風通しのいい簡素な生活をしようと心を決めて、捨てに捨てたものだった」と述べている。

これら二つの意見に共通するのは、文明の発展段階で必ずしも真に必要でない見せかけが本物を隠してしまったという認識であろう。あり余る物に囲まれて生活していると、一体何が本当に必要なものがわからなくなってしまうのである。ソローの森の生活は、自らを束縛する一切の人工のものから解放された、自由で自律的な生き方である。

本論は、現代の過度に物に依存する生活—それゆえの地球規模の環境破壊—を見直す契機として、ソローの森の生活の意義を再検討し、彼の生き方にインスピレーションを受けた人々の足跡を辿り、文明の量ではなく質を問い直す点にある。その取り扱う範囲は一九世紀中葉から現在まで、特に高度物質文明が問い直され始めた第二次大戦後の、ソローの森の生活をウィルダーネスで直接実践したアンジャー夫妻の『森の中の家—現代のソローの生活』（一九五一年）、ソローの哲学を現代に見事に反映した、リンドバーグ夫人の浜辺の生活体験『海からの贈りもの』（一九五五年）、

そして世界的な環境破壊に対して敢然と立ち向う、現代のソローたるマッキベンの『自然の終焉』（一九八九年）に焦点をあて、一体文明の進歩とは何だったのかを考察する。

第一章――ソローと現代

カンガルー裁判

以前外国人の指紋押捺の是非が日本国内で大きな社会問題となっていた時、次のような記事がアサヒ・イーヴニング・ニュース（一九八五年四月一日）に掲載され、注意を惹いた――「カンガルー裁判で不当判決――指紋押捺に反対する。」「カンガルー裁判」というのは、カンガルーの歩行が不規則で飛躍的であることから、英語で法律を無視したり曲解して行う裁決のことをいうが、「オックスフォード英語大辞典」によれば、その初例が一九六六年のニューヨーク・タイムズということなので、比較的新しい表現である。

この記事の中、日本の大学で英語を教えている、あるアメリカ人女性は、自らの良心に則り指紋押捺を拒否した。当時の外国人登録法に照らし合わせてみれば、彼女の行為はあくまでも違法な行為であり、彼女は一万円の罰金という実刑を受けなくてはならなかった。その際彼女は、「私はソローの市民的不服従と非暴力抵抗の理論をもって説明しようとしたが、検察官に通訳を断られてしまった」と語っている。そして「ソローは自ら何も悪いことをしていないと信じる限りは、刑務所こそ世界中で最も自由な場所であると述べている」と付け加え、彼女は「自らの良心を売ってまで」一万円の罰金を払うよりは、五日間の刑務所入りをあえて望むのであった。

指紋押捺を拒否したアメリカ人女性が、自らの発言の中で幾度となく言及しているソロー、及びあまり耳慣れない「市民的不服従」という言葉について、この記事を英字新聞で読んだ読者の中にもその正確な内容は捉えられなかったであろうし、ましてや一般の読者はなおさらであろう。

「良心に則り刑務所に入る」という言葉は、ソローが当時の悪しき存在だとみなしたメキシコ戦争（一八四六～一八四八年）と奴隷制度に反対して、人頭税不払いを実践し、その挙句に逮捕投獄された事件を下敷きにして書かれた『市民としての反抗』（原題は Civil Disobedience、文字通り訳せば市民的不服従となる）の中の一節――「人を不正に投獄するような政府の下では、正義の士の住むべき真の場所は牢獄である」――に由来する。

この小著は、第二次大戦中のデンマークにおけるナチズムに対する抵抗運動や、インド独立運動の指導者マハトマ・ガンジー、更には黒人解放運動の指導者マルティン・ルター・キング・ジュニアの精神的支柱となったもので、ロバート・B・ダウスンが編集した『アメリカを変えた本』の二五冊の一冊として挙げられているばかりか、同氏による『世界を変えた本』の中では、聖書、ホメロスやプラトンなどの古典、ニュートンの『プリンキピア』、アダム・スミスの『国富論』、ダーウィンの『種の起源』、マルクスの『資本論』などと共に堂々と名を連ねている世界の名著なのである。アメリカから選ばれたのは、トマス・ペインの『コモンセンス』、ストウ夫人の『アンクルトムの小屋』、マハンの『海洋支配力の歴史に及ぼす影響』、カーソンの『沈黙の春』にすぎず、いかに『市民としての反抗』が、国家と個人の関係を扱った書の中でアメリカの名著であると同時に世界の名著であったかが想像できるだろう。

「政治運動の一部として、政府の法や税金などの要求に対して従うことを拒否する」市民的不服従の概念は、ソローのこの書を通して有名になったが、国家と個人の関係の中で個人の良心を優先するという理念そのものは、少なくとも聖書と同じくらい古いものであった。ソローはそれに現代的な重要性を与えたのであり、今やその概念の創始者として世界的に知られるに至ったのである。

マハトマ・ガンジー

アッテンボロー監督による『ガンジー』の映画を見てだれしも心をうたれるのは、ガンジーの唱える高貴な非暴力主義の生き方であった。その起源はガンジーの南アフリカ時代にさかのぼることができる。一九〇七年、南アフリカでは日本の外国人登録法と同じようなアジア人登録法が実施されていた。この法は、八歳以上のアジア出身者に対して登録を義務づけるもので、その内容は、住所、氏名、年令、カーストはおろか、犯罪人のごとく本人であることを証明しなければならない指紋を必要としていた。拒否すれば、罰金か刑務所行きか、あるいは国外追放を免れなかった。

当時南アフリカで人種的偏見と戦っていたガンジーは、この「暗黒の法」に接して、「私は世界のどこかの国で、このような性質の法律が自由な人間に対して行われているということを知りません」と述べ、彼自身登録を拒否し、ソローと同じく悪しき政府とは妥協せず、自らの主義と良心に則って刑務所へと入って行った。

既にガンジーはソローの『森の生活』を読んでいて、機械に支配されないように生きる決意をしていたが、まもなく『市民としての反抗』を読み、非暴力抵抗運動の思想的基盤を見出したのであった。彼は「アメリカはソローという師を私に与えてくれた。彼の市民的不服従論は、私が南アフリカでやっていることを科学的に証明してくれた」と語っている。そしてそれまで使っていた消極的抵抗（passive resistance）に代わりcivil disobedienceを採用し、ヒンズー教徒のためにそれに相当する言葉として「サティアグラハ（Satyagraha）」を造りだした。これはサンスクリットの二つの単語を合わせたもので、「魂の力」とか「真実と愛から生まれる力」、すなわち非暴力といった意味である。ともかくソローに思想的拠り所を見出して、アジア人登録法を拒否し、自ら刑務所に入ったことを契機に、ガンジーはそれまでの一弁護士から政治的指導者へと変身する。

マルティン・ルター・キング牧師

一九五四年五月、合衆国最高裁判所は公立学校における人種隔離は憲法に違反するという画期的な判決を下した。しかしそれにも拘らず、黒人差別は一向に衰えなかった。一九五五年一二月一日、アラバマ州の州部モントゴメリーの下町からバスに乗った一黒人女性が、白人に座席を譲ることを拒否し、逮捕投獄されるという事件が起きた。この女性の勇気ある行動を契機に、人種差別を象徴するバス・ボイコット運動が始まった。

ここに現代の黒人解放運動の原点を見出すことができよう。この運動を、愛と非暴力の精神で三八二日間もの長きにわたって続け、輝かしい勝利に導いた指導者こそキング牧師であった。以後彼の名声はアメリカ国内はもとより海外にも広まり、リンカーン大統領が奴隷解放宣言を発したちょうど一〇〇年目にあたる一九六三年八月二八日、世に言うワシントン大行進へとつながってゆく。

その際キング牧師が、リンカーン記念館前の広場を埋めつくした二〇万の聴衆に向って述べた「私には夢がある。いつの日か、私の四人の小さな子供たちが、皮膚の色によってではなく、人となりそのものによって人間的評価がなされる国に生きる時がくるであろう」という有名な演説は、皮膚の色を越えて多くの人々の共感を得るものであった。

バス・ボイコット運動やワシントン大行進に見られるキング牧師の非暴力抵抗の理論は、『自由への大いなる歩み』の中で述べているように、アトランタのモーアハウス大学時代に読んだ『市民としての反抗』に由来する。「僕は悪しき制度との協力を拒否せよというソローの考えに魅せられて、心の底から感動し、数回にわたってこの本を読みふけった。」その感動が、やがてバス・ボイコット運動を進めて行く上での理論的裏付けとして結晶する。彼は運動の信条を次のように語っている。

僕たちが本当にやろうとしていることは、ただバス会社への経済的な

支持から手を引くことではなく、むしろ悪しき制度への協力から手を引くことだということがわかってきた。人種的隔離という悪しき制度を表面にあらわしているバス会社は、もちろんボイコットによって傷手をうけるだろう。だが根本的な目的は悪との協力を拒絶することなのだ。ここまできて、僕はソローの『市民としての反抗』について考え始め、大学生時代に初めてこの本を読んだ時、ひどく心を動かされたことを思い出した。

キング牧師は悪しき制度に対抗するための手段として非暴力抵抗を用いた。彼の非暴力抵抗の中心には「愛の原理がある。暴力に暴力をもって報いることは、なんらの効果ももたらさず、かえって憎しみを強めるにすぎない」のであった。それは「必要とあらば他人の暴力を甘受するが、自らは決して反対者に暴力を用いることはせず」、「反対者の友情と理解を勝ち取るために、反対者の心に道徳的恥辱感を目覚めさせる」高貴な方法であった。

愛による非暴力抵抗運動は、ソローというよりはガンジーの影響が大である。キング牧師は、「ガンジーの教えた非暴力という手段を通して働くキリストの愛の教えこそが、自由のための闘争のなかでニグロが手に入れることができる一番強力な武器だと悟り」、「自由のための闘いのなかで抑圧された人々に与えられた、ただ一つの道徳的にも実際的にも健全な方法」であると述べている。

彼らはソローの政府に対する個人的不服従を集団のレベルにまで進めて、非暴力抵抗運動としたが、皮肉にも彼らは、銃弾に倒れてしまった。しかし彼らの遺志は脈々と現在にまで伝えられてきたのは間違いあるまい。昨今のダライ・ラマ師やスーチー女史にノーベル平和賞が授与された理由の第一は、暴力のたえまない世界にあって、非暴力運動を実践し、弱者のために民主化を進めているからに他ならない。ガンジー、キング牧師、ダライ・ラマ師、スーチー女史などの、一見弱々しく見える非暴力抵抗運動が最終的に成功したのは、民衆の心を動かすものが鉄や鉛の武器による脅しではなく、純粋な愛の哲学に裏打ちされた、自由と真実を求める彼らの声であったことを教えられる。

森へ

『市民としての反抗』がガンジーやキング牧師にこの上もない影響を与え、後の彼らの運命、いや世界の歴史をも変えた事実はいくら強調しても強調しすぎることはないが、政治的側面はユニバーサル・マンとしての人間ソローのごく一部にすぎず、むしろ彼の生涯の大半は詩人として、ナチュラリストとして、自然と人間の絆を回復しようとしたことに費されたのであった。

一八四五年七月四日のアメリカ独立記念日に、ソローは自ら生れたコンコードの村から二キロメートル離れた森の中にあるウォールデンという小さな湖の畔（ほとり）に小屋を建て、二年余の自給自足の生活を始めた。彼自身の言葉によれば、「私はマサチューセッツ州のコンコードの森の中で、一番近い隣人が一マイルも離れているウォールデン湖畔に、自分で建てた家に住み、自分の手による労働だけに頼って生活の糧を得ている。」

ソローの森の生活は、今から考えれば自然との絆を回復しようとする、人類のエコロジカルな第一歩であったといえる。これは皮肉にも一九世紀中葉を境に、それまでまがりなりにも維持し続けてきた人間と自然の均衡のとれた関係が決定的に破られようとしている事実を象徴的に物語ることでもあった。

ソローの森の生活、この生活体験を基にして書かれた『森の生活ウォールデン』（一八五四年）が、現在のような地球的規模の環境破壊に、かつその複雑さゆえに解決方法が見出せない中で、一つの生きる指針を与えてくれる。『森の生活』は、一世紀半も前に物質文明の前途に懸念を表明し

たものであり、辛辣な文明批判書である。彼がこの中で発した絶叫に近い言葉が、高度な現代物質文明に対する鋭い警鐘となる。彼は文明の不可逆性は認めるにしても、文明の進歩に見あった人間の進歩の重要性を強く訴えるのであった。

森に行った理由

ソローは『森の生活』の中で森へ行った理由を次のように簡潔に述べている。

> 私が森に行ったのは、悠然と生き、人生の根本的事実にのみ直面し、できればその教えを学びたいためであり、いよいよ死ぬ時になって、自分が生きて来たという証しが欲しかったからである。私は人生でないものを生きることを欲しなかった。生きることはそれほど大切だったから。……私は深く生き、人生のすべての精髄を吸い出したかったのだった……

人間存在の画一化、生の稀薄化が進行する中で、この一節ほど生の重みを教えてくれるものはない。喪失感と倦怠感、卑小さの自意識がつきまとう現代において、人々はこの一節に生きる意味を見出す。文明発展のプロセスは、人間と自然との関係を稀薄化するプロセスでもあった。森を離れ、森を切り開くことが原始性を脱し、文明化への道だと錯覚する人々が多い中で、彼はあえて森の中へと入って行った。そこでは時計によって定義される文明的時間はなく、自然の時の流れが支配していた。

アメリカの作家ライト・モリスは、「この言葉ほど多くの人々をとらえるものはない。それは古典的な宣言であり、文明は本質的なものから人々の目をそらしているのだ。この一節に魅了されることが、本質的な自我に到達する第一歩である」と語り、「森へ行くことは、自然に則った生き方が保証される、象徴的なアプローチである」と述べ、森行きを勧める。

またケネディー大統領がその死を痛むほどアメリカ国民に愛された、多分にソローの影響の強い詩人ロバート・フロストは、『森の生活』出版一〇〇周年目にあたる一九五四年、『リスナー』誌上のインタビューで次のように語っている。

> ソローが現代のペースから独立を宣言したことに、私との類似点がある。彼は悠然と生きるために森に入って行った。考えてみれば、私も悠然と生きるために各地へ出かけて行ったのだ。私は花の区別ができる、時速半マイルの速さの車が欲しい。私が耐えられないのは、現代のスピードに愚痴をこぼしながらも、それについて行こうとする大衆である。

フロストがソローの森の生活の特徴を「悠然」と形容したのは当然で、ソローが語る「自然と同じく悠然と一日を過す」という、その悠然さなのである。アメリカの産業革命の最中の一九世紀中葉、当時を席巻していたベンジャミン・フランクリン流の「時は金なり、信用は金なり」、いや散歩すら非生産的なものとして否定され、まるで人間の価値は貨幣の多少によって決定されるがごとくの風潮に対し、ソローはウォールデン湖にボートを浮かべ、風のなすがままに漂う。そして「無為こそ最も魅力的で生産的な仕事である」と公言する。

同じような体験が自然人ルソーによってもなされている。ルソーは一七六五年、ビエーヌ湖上にあるサン・ピエール島で二月余りを過したことがあった。彼の波乱に富む生涯の中でも「最も幸福な時であった」と『孤独な散歩者の夢想』の中で述懐するこの時、ソローと同じく湖に小舟を浮かべ、そこに身を横たえて波に漂うにまかせたのであった。彼はこの行為を「閑居に身をゆだねた人間に必要な甘美な仕事」、「尊い無為」と呼んだの

であった。これらはバートランド・ラッセルの言う「怠惰への讃歌」の典型的な例である。

『森の生活』の影響

ソローの『森の生活』は、自然の中で悠然と暮したいと考える多くの人々に少なからずの影響を与えた。アイルランドの詩人W・B・イエイツは、『自伝』の中で「以前父が『森の生活』の一節を読んでくれたことがあった。私はいつの日か、イニスフリーと呼ばれる小さな島〔アイルランドのギル湖に浮かぶ小島〕の小屋に住む計画を立てた。私は肉体的欲求、女性や愛に対する私の性向を克服して、ソローのように知を求める生活を試みなければならなかった」と述べている。『森の生活』にインスピレーションを受けて書かれるに至ったのが、有名な詩「イニスフリー湖島」である。

いざ立ちて、ゆかばや、イニスフリーへ。
粘土ひねり、細枝編み、小さき茅舎かしこに建てん。
畑九畝、豆を植え、蜜蜂の巣をいとほしみ、
ただひとり住まはなむ、蜂うたふ林のなかに。

ソローは『森の生活』の第三章「読書」の中で、「いかに多くの人がある本に接して、自分の一生に新しい時代を築くことになったか」と述べているが、彼の『森の生活』はイエイツを含む多くの作家達のインスピレーションの源泉であったばかりでなく、一般のレベルにおいてもその人の人生を根本的に変えることすらあった。ソロー自身は自分の生活の真似はしないでほしいと述べているが、彼の森の生活を試みる人は多く、特に若者の間で見られる。次のようなエピソードにもその一端が窺われる。

ミシガン州のデトロイト市の本屋の店員が、客の注文で『森の生活』を捜しているうちに彼自身がその本に魅了され、本屋の店員をやめて、森に行き、そこで小屋を建て、数年間暮した。彼はそこでの体験を通して詩を書き始め、賞を取るに至ると、再びデトロイトへ戻り、昔のガールフレンドに求婚し、結婚した。彼女をつれて再度森へ戻って行ったが、彼女は彼に彼女を取るか森を取るかを迫り、結局彼は彼女を取って文明に戻り、それとともに詩を書くのをやめてしまった。

ある保険会社社長の御曹司が、イエール大学を卒業するやいなやマサチューセッツ州南部にある小山の頂に小屋を建て移り住んだ。彼は成功の梯子を上るのを拒否したのである。一年後家族の説得で、実家に戻って行ったが、その後も彼の心はいつも一年間暮した山に戻って行くのであった。

これら二つの例は、ソロー自身の森の生活と同じく、永久に森の生活を続けることにはならなかったが、物質文明の洪水の中で見失った何かを求める企てであった。森の生活を実践することによって、観念的ではない本当のソローに接しえたはずである。ソローの森の生活は、生きるという緊張感を失った人々をふるい立たせる。

ソローは『森の生活』の中で、「外面的文明の只中でも原始的辺境の生活をすることは、いくらかでも利益がある」と述べているように、最初からソローの森の生活は、時代を問わず、だれによってもどこにおいても可能であることを示していた。ソローの森の生活は自然から疎外された都会人に脱出の夢を支える。それは決して退行でも退却でもなく、自由で新しい生活を試みる象徴的な第一歩なのである。

長らく『ニューヨーカー』誌の寄稿編者であり、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』のエピグラフ――「私は人類にたいした希望を寄せていない。人間は、かしこすぎるあまり、かえってみずから禍いをまねく。自然

を相手にするときには、自然をねじふせて自分の言いなりにしようとする。私たちみんなの住んでいるこの惑星にもう少し愛情をもち、疑心暗疑や暴君の心を捨て去れば、人類も生きながらえる希望があるのに」――にも引用されたE・B・ホワイトは、『森の生活』の意義について次のように語っている。

『森の生活』は若者にとって人生最高の手引書であり、貴重なものを失ったことに対する厳粛な警告書でもある。もしアメリカの大学に分別があれば、卒業生に安いポケット版の『森の生活』を卒業祝に贈ることであろう。……この小さなウォールデン湖は、八月の穏やかな雨嵐のない間、最も貴重な存在となる。静かで清澄で無垢な夏の日の午後、すべての懸念や不安が一掃される。まるで眠っている子供を見ているように、楽しい一時の間奏曲となる。……「簡素に、簡素に、簡素に」という言葉が、あたかも火災報知器のごとく現代に警告する。

ソローの森の生活を一語で要約すれば、簡素（simplicity）になるが、それは単に森での簡素な衣・食・住の詳細ではなく、人間をも含めた自然に対する彼の謙虚な心の反映であり、この美徳こそ現代で最も失われたものの一つであると思われる。

ビート・ジェネレーション

一九六七年七月一二日、ソロー生誕一五〇周年を祝う記念切手が発行された時、だれしもヒッピーを連想するほど、ソローの顔は髭が伸びほうだい、髪は櫛を入れずだらしなかった。もともとアメリカのビート・ジェネレーションには、ソローを反文明、反体制的なアイドルとみなす傾向が強かったので、まことにふさわしい容貌といえる。しかし実際のところソローは、冬の寒さから持病の気管支炎を防ぐために顎髭を伸ばしていたのであり、ソローの容貌、特にその眼は高潔で憂愁に満ちたリンカーン大統領を彷彿とさせるものがあった。

それはともかく、森に行き、森の中に移り住むことこそしなかったが、原始生活や禅に興味をもち、社会の歯車の一つとして機能することを断固として拒否して、科学物質文明を離れ、各地を放浪したグループが、俗にビート・ジェネレーションと呼ばれる一九五〇年後半のアメリカの若い作家群であった。

一見彼らは容貌や服装には無頓着で、髭をはやし、長髪でサンダルばきというだらしない身なり、その上ジャズにうつつを抜かし、マリファナやセックスにのめりこむ反体制的な不道徳な若者（俗に言う風俗ビート）に映ったが、人間存在が機械や物によって危くされている現実に対して、敢然と立ち向ったその姿勢は評価されよう。手段はどうであれ、彼らは人間の原点にまでさかのぼって、人間存在の威厳を追い求めてやまなかったのだった。

ビート世代を代表する作家ケルアックは、人生に行き詰まった時、『森の生活』を読み返してはソローを思い出している―「自らに与えられた唯一の生活は、ソローのように文明を離れて生きることである。」ソローの森行きは、自分を変えようとする際の象徴的モデルとなる。ケルアックはソローを通して仏教に目を開いている。

ビートの若者達の出会いと友情とを描いたケルアックの小説『ジェフィ・ライダー物語（*The Dharma Bums*）』のモデルであるゲイリー・スナイダーは、長らく日本でも禅の修行をしたことのある詩人だが、若い頃アメリカの山々を歩き、森林監視人や樵をもした、風変わりな経歴の持主である。彼は現在カリフォルニア州シエラネバダ山脈中に住み、「野生」を実践するかたわら、環境問題に対して積極的に発言している。彼もソローの「簡素な生活・高き想い」をモットーとする、森の生活の伝統の中に確固とした位置を占めているといえよう。

確かに文学としてのビート・ジェネレーションは、アメリカのルネッサンスと言われる一九世紀中葉のような豊饒な時代を画するに至らなかったが、彼らの影響は文学活動にとどまらず、広く個人の生き方そのものに及んだことは重要である。機械的人間であることを断固として拒否する彼らの行動は、便利さ、快適さとともに自らの魂を売りとばし、自らの威厳を顧みることをしなくなった現代人に対する痛烈な風刺となった。多くの人々は、表面的にはビートの風俗に背を向ける。市民としての責任を放棄するものであると言う。しかし彼らが主張していた自由で本質的な生き方には、内心共鳴するところが大であったに違いないのである。

新しい流れ

『市民としての反抗』が、ガンジーやキング牧師が率いる虐げられた人々のための運動にその拠り所を与えたのに対し、『森の生活』は個人のレベルではライフスタイルの変更を促し、社会的レベルではアメリカの自然保護運動の中にその精神が受け継がれてきた。

それは決して政治の檜舞台で華やかな活躍をする人々ではなく、自然を愛する人々、作家や芸術家、自然保護に関わる人々、森林監視人、リサイクル運動に関わる人々らによって熱心に読み継がれてきた。彼らの活動は地味であるけれども、アメリカ社会の隅々にまで浸透している。ソローの生き方は決してアメリカ社会の主流とは言えないが、対抗文化としてアメリカ精神史の一部を着実に担って来たのは間違いないのである。

確かに第二六代大統領セオドア・ルーズベルトは、自然保護の父と言われるジョン・ミュアと親交を結ぶほどの自然を愛する稀有な大統領であったが、彼とてもその地位ゆえに開発と自然保護の軋轢を完全に修復することは不可能であった。アメリカの自然を保護してきた人々の武器はペンであった。「ソローからレイチェル・カーソンまでの自然に関する書がなければ、アメリカは今日の姿とは大きく異なっていただろう」と言われている。

ソローは『森の生活』の中で、小屋を訪れる小動物や、森に見られる植物を通して人間と自然の好ましい関係を語っているが、自然保護に関して直接言及した箇所は、むしろ『メインの森』や、二百万語にも及ぶ膨大な日記の中に見出せる。例えば一八五九年一〇月一五日の日記の中で、現実に破壊の進むウォールデンの森全体を自然保護地区に指定すべきであると切々に訴えている。

> どの町も五〇〇あるいは一〇〇〇エーカの公園、もしくは原生林をもつべきで、そこでは一本の枝も燃料のために切ってはならず、教訓とレクレーションのための永遠の共有地とならねばならぬのである。……すべてのウォールデンの森は、ウォールデン湖を中心にしていつまでも公園として保存されるべきであり、約四平方マイルの未開拓地であるエスターブルックス・カントリーは我々のハックルベリーの野原となってしかるべきである。

これこそアメリカの自然保護に関する先駆的発言である。（ソローが主張したウォールデンの森の保存は、紆余曲折を経ながらも最近の「ウォールデンの森を守ろう」とする運動につながっている。）もっともこの認識は皮肉にも人間が自然を守ってやらねばならなくなった状況を鮮明にするものでもある。人間の助力なくしてはもちこたえられなくなってしまった、いわば公園の枠に入れられてしまった自然は、もはや自然とは呼べぬかもしれない。晩年ソローが野生的自然への傾斜を強めていった背景に、こうした迫り来る自然破壊への警鐘を読み取ることができよう。なお、自然保護に関する生駆的発言があったこの年、アメリカでは石油が発見され、鯨油に取って代わったが、この年をもって、人類は石油文明の道を歩み始めたのであった。

対抗文化としてのシンプルライフ

ソローの自然保護に関する論はひとまずおいて、個人のライフスタイルに与えた影響を考えてみることにしよう。ソローは人間の真の幸福は、物の豊かさではなく知性や美徳にあると考え、「人はなしですませる数に比例して豊かである」と述べ、自ら簡素な生活を実践する。

ところがここ一世紀半の文明の歩みは、物を豊かにさせることに注がれてきて、西側先進国では必要な物は簡単に手に入る時代に突入した。もっともより高い生活水準を人々が求め、企業がそれに合った商品を開発するので、必要以上のものが生産されているのが現状である。そうしなければ景気が後退し、利潤が低下し、失業者が増大すると経済学者は言う。しかしそうした経済は真の意味で成熟しているとは言えない。現在の行きすぎた生産と消費が、かえって負債を増加させ、経費を不定的化させ、またいかに地球に負担となっているかは昨今の環境問題がよく物語っている。

ガルブレイスの『豊かな社会』（一九五八年）は、そうした矛盾をついた画期的な書であった。その伝統を受け継いだ、ドイツ生まれのイギリスのエコノミスト、シュマッハーは、『小さきことは美しきこと―人間復興の経済』（一九七三年）の中で、人間的な価値を軽視した、ＧＮＰの無制限な拡大を信奉する経済に異論を唱える。「近代経済学者はいつも、より多く消費する人が少ない消費の人よりも暮し向きがよいと想定し、年間の消費量によって生活水準を測ることにしている。」しかし「必需品の簡素化と削減ができないかどうか吟味すること」も大切であり、何よりも「経済学は人間の研究からその目標と目的を引き出すと同時に、少なくとも自然の研究からその方法論の主眼を引き出さなければならない」のである。

デイヴィッド・シャイは『シンプルライフ――アメリカ文化における簡素な生活と高き想い』（一九八五年）の中で、シュマッハーの著書に言及して、「現代人は、その物質的欲望と社会構造を縮少することによって、精神的欲求によりよく合致し……小さきことは、美しいばかりでなく、より健康で、より安価で、つまるところより満足できる」と語る。

カーター大統領もシュマッハーの著書を既に読んでいた。エネルギー危機とエコロジー危機がアメリカ人の生き方に厳しい見直しを迫ることになろうと考え、その就任演説の中で、「我々は『より多く』が心然的に『より良い』ではないということを学んだ」と述べている。しかし進歩的なカーター大統領の意図にも拘らず、国民は生活水準の低下を招くシンプルな暮し方を拒否した。より少ないもので生活しようとするライフスタイルは受け入れられなかったのであった。その後の大統領選で、カーターが経済の拡大を主張するレーガンに敗れたことは周知の事実である。

一九七三―一九七四年のアラブ各国による石油輸出停止は、消費至上主義にブレーキをかけ、消費が美徳の時代から環境に優しい時代への変化かと思われた。しかしエネルギーに対する危機感が薄れると、ＬＥＳＳＩＳ ＭＯＲＥの動きは下火となり、ＭＯＲＥ ＩＳ ＭＯＲＥとなり、ＳＭＡＬＬ ＩＳ ＢＥＡＵＴＩＦＵＬはＢＩＧ ＩＳ ＢＥＴＴＥＲに取って代わられてしまった。

だがシャイも言うように、「社会倫理としては失敗だったシンプリシティーがアメリカ文化の複雑なパターンに強い影響を及ぼし、物質主義者の個人主義の行き過ぎに対する生き生きとした対位法を提供しながら、国家の良心としての役目を果してきた……その理想は、幾百万人を動かさないかもしれないが、いまなお倫理的に感受性豊かな想像力をとらえている」のである。対抗文化の一つとしての簡素な生活志向は、アメリカ社会の中でも是認されたのである。その原点をソローの森の生活に見出そうとするのが本論である。

緑（グリーン）の流れ

ここ数年の地球規模での環境破壊の現実は、人々にいっそうシンプリシティーの必要性を訴えるものである。消費は美徳から環境に優しい時代へ

と確実に変わってゆかねばならない。『自発的なシンプリシティー』（一九八一年）には、ライフスタイルを見直すための具体的方法が紹介されている。その幾つかを挙げると、

全体的な消費を抑える――例えば服などの場合は、流行に左右されず、機能性や耐用性を第一に考える。なるべく服は買わず、宝石や化粧品は減らす。

耐用性、修理がしやすく、環境を汚染せず、エネルギー効率のよい機能的で美的なものを考える消費パターンに変える。

加工食品から、自然で健康的で単純な食品へ変える。

倫理に反するような会社の製品をボイコットする。

リサイクル運動や環境保護運動に関わる。

省エネの実践を心がける。

著者のエルジンは、このようなライフスタイルの確立は、既存の経済秩序の転覆をはかるものではなく、むしろ無駄な物を排し、経済を活性化することにもつながると言い、「シンプリシティーは進歩には極めて重要なもの。……自発的なシンプリシティーは『新しい成長』の道である」と述べて、進歩や成長を肯定する。当然のことながら、彼にとってソローの森の生活は、「物質的進歩を離れた、孤立した自給自足の生活のイメージ」しかもたなくなる。

『自発的なシンプリシティー』は、大量消費型の経済構造を変え、ライフスタイルを変革する具体的方法に関して多くの点で首肯できるものの、その理念が進歩や成長にある限り、現代の緑の流れには、受け入れられないであろう。せっかく副題に「外面的にはシンプルであるが、内面は豊かな生活様式を求めて」とあるのに反して、内面は一向に豊かさを与えてくれないのである。私たちには『深いエコロジー』（一九八五年）の主張――物質的経済的成長の代わりに簡素で品位のある物を望み、消費志向の代わりに、足りる分だけでまかなう生き方――が参考になろう。

現代の緑の人々は、進歩や成長の概念をむしろ地球に対する危険な行為とみなしている。例えばブライアン・トーカーは『緑のもう一つの道』の中で次のように述べている。

私たちは成長を前提にした経済学に代わる新しい経済学の枠組を求める……今日の政治家の大多数は、飢えた人々に食料を与え、生活水準を向上させるために、絶えざる経済拡大が不可欠との信念をもっている。これに対し緑の人々はこれを危険な神話と考える。緑の人々は、際限のない生産活動の拡大が、今日の世界をエコロジカルな破滅の瀬戸際に追いやっていると考える。……これ以上の産業化推進により、人類にもたらされる利益が何であれ、これに伴う危険の方が今やより大きいことが、多くの緑の人々にとり既に自明のことになっている。

今や文明の進歩はその利益よりも危険を伴うというトーカーの意見は、我々一人々が肝に銘じなければならないであろう。数年前、地球環境の悪化が多くのマスコミをにぎわせていた頃、極めて実践的な『地球を救うかんたんな五〇の方法』（一九八九年）が出版された。その内容は、ダイレクトメールや発泡スチロール製品の拒否、無リン洗剤や充電式電池の使用、水を節約しよう、古新聞をリサイクルしよう、なるべく車に乗らないようにしよう……など、日常生活全般にわたる見直しを通しての環境意識の高

揚を訴えたものであった。『環境に優しい消費者』（一九八八年）も同じ方向を目指し、地球に負担をかける消費はやめなければならないと説く。

こうした書は多くの人々に影響を与え、実際これに基づいてライフスタイルを変えた人も結構いるはずである。現在の環境問題の真の原因が、地球のキャパシティーを越えた傲慢な人間活動によるものである以上、汚染者である私たち一人々の行為が戒められなくてはならない。ソローの森の生活は、私たちに生きる意味を問い直させてくれる、恰好の機会を提供する。

『森の生活』と日本

ソローは『森の生活』の中で一箇所だけ日本に言及している。もっともそれは「陳腐になったシナや日本」と述べられたにすぎず、地理的な意味以上のものはなかった。ただ彼の住む小屋の照明が「漆（うるし）塗りのランプ（japanned lamp）」であったから、その連想で日本が存在したかもしれない。

ソローの森の生活（一八四五―一八四七年）の頃は、日本で言えばまだ泰平の眠りをむさぼっていた時である。当時物理的に最も近かった日本人はジョン万次郎であった。当時万次郎は彼を救助してくれたホイットフィールド船長の故郷、マセチューセッツ州フェアヘイヴンの町で暮していた。ソローの住むコンコードとは距離にして約一〇〇キロメートル離れているが、二人とも知る由がなかった。もっともソローは晩年フェアヘイヴンの隣り町ニューベッドフォードに友人がいて何度もここを訪ねているので、ひょっとしたら話の中で風変りな日本人のことを耳にしたかもしれない。

ソローがいつ日本に紹介されたのか、その正確な年代は不詳であるが、一八八〇年代までには一部の英文学者の間には知られていたようで、『森の生活』の抜粋が、『英文学ハンドブック』（一八八三年）という大学のテキストの中に掲載されていた。そこには日本人読者が好みそうな農業を扱った「豆畑」、孤独と自然、果実を扱った「ベリー〔イチゴの類〕」、移りゆく季節の変化を扱った「湖」の一節が紹介されていた。

『森の生活』が水島耕一によって初めて訳されたのが明治四四年（一九一一年）のことだった。武者小路実篤は大正七年（一九一八年）、日向に「新しき村」を創設する前に、『森の生活』を読んだと著書の中で語っている。当時としては比較的早いソロー体験と言えようが、ソローが個人主義に徹したのに対して実篤は共同体に固執する。実篤の実験は多分にロシア革命の影響が色濃く反映されているので、ソローとの差はおのずから歴然としているが、その真意は共通するものが多かった。

一方、『市民としての反抗』は、背景に富国強兵という非民主的時代があって、とても紹介されるには至らなかった。日本人読者の初期のソローの印象は、森の中で簡素な生活を送る、鴨長明のような隠遁者であるという範囲に限定され、今日に至るまで数多くの翻訳が出版されたわりには、彼の人間像は明らかにされることは全くと言っていいほどなかった。

『森の生活』と『方丈記』

冒頭の一節―「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」で有名な『方丈記』の著者鴨長明とソローが比較されるのは、森の中での生活ゆえである。アメリカの著名な文芸評論家のレオン・エデルはその著『ソロー』の中で、二人の比較を行っている。「鴨長明は『森の生活』が書かれる七世紀も前に『方丈記』という本の中で、一〇フィートの小屋の生活を描いている。彼は三〇年間〔正しくは八年間〕そこに住み、東洋流のやり方で自らの中に解答を見出した。ソローの方は東洋間係の書物は読んでいたものの、西欧に開国していなかった日本の書物は知る由もなかった。ソローはウォールデンの小屋を永遠の住み処とはみなさず、『自分の仕事をするために』そこへ行ったと言って、建てるとすぐに立ち去った。『方

丈記』は生活の方法を描き、『森の生活』は主としてそのそぶりをみせただけであった。」

確かにエデルの言うように、二人の生き方には明確な差がある。鴨長明が出家し、俗世を避けて隠遁の道を選び、人生の無常を描いたのに対し、ソローは自らを隠者と呼ぶものの、世間との関わりを拒否する反社会的なものではなかった。彼の生き方はそのそぶりはしているものの、決して宗教的な禁欲主義の類のものではなく、文明の進歩の中で人間の有様を問い直すことにその主眼があった。

いずれにせよ二人が社会に背を向けて、自然の中で独居生活をするという行為が、人類の一つの象徴的な行為となった。そこで何を学んだかが肝要となる以上、場所や滞在期間の長短はあまり意味のないことである。

ソローと東洋

『森の生活』を読むと、日本人にもよく知られている論語の引用にたびたび出くわす。例えば、「知るを知るとなし、知らざるを知らずとせよ、これ知るなり」、「徳は孤ならず、必ず隣あり」、「君子の徳は風なり。小人の徳は草なり、草はこれに風を上うるとき必ず偃す」、「三軍もその師を奪うべし。匹夫もその志を奪うべからず」などがある。ソローは西欧文明の合理主義に反発して東洋に目を向けたが、もちろん順応主義を説く儒教主義者ではない。彼は自らの生き方に都合のよい聖句を東洋の古典から借用したまでである。

ソローは社会に開かれた孔子よりは、自然の神秘性、簡素性の重視、因襲や政府の干渉に対する嫌悪、逆説の多用から見て老子に近い存在だと考えられるが、一九世紀半ばの段階では老子は殆ど紹介されず、彼の目にとまらなかった。

このようなソローの東洋性に禅的要素を見出し、西行や芭蕉との親近性を指摘したのが、鈴木大拙であった。実際『森の生活』を読む読者は、簡素な小屋に住み、簡素な生活を実践し、毎朝湖で身を清め、瞑想するソローの姿と禅宗の修道僧を容易に重ね合わすことができよう。「音」という章の、次のような一節を読めば、一層その感が強くなるであろう。

最初の夏は本を読まなかった。私は豆畑の草取りをしていた。いや、私はしばしばもっとよいことをしていた。現在のこの咲き匂う花のような瞬間を手の仕事にもせよ、頭の仕事にもせよ奉げてしまうのはどうにも惜しくてできないことであった。私は私の人生に幅の広い余白をもつことを愛した。時々、夏の朝、いつもの水浴をすませた後、日の出から正午に至るまで、私は日あたりのよい戸口で想いにひたって座りこんでいた。松やサワグルミやウルシのただなかで邪魔するもののない孤独と静寂との中で。鳥はあたりで歌い、あるいは音もなく家を通り抜けて飛びかけった。ついに西の窓に差し入る日影とか、遠方の街道を通る旅行者の荷車のひびきとが私に時がたったのを気づかせるのであった。

ソローの住む小屋は、何もないという点において日本の茶室のごとく、風景の一部となっている。飾りけのない単純性は禅の求めるところである。鈴木大拙は『禅と日本文化』の中で、日本文化に特徴的な「わび」をアメリカ人読者に説明するために、ソローの森の生活を例示する――「日常生活の言葉で言えば、わびはソローの丸太小屋にも似たわずか二、三畳の小屋に起臥して、裏の畑から摘んだ蔬菜の一皿で満足することであり、静かな春の雨の蕭々たるに耳を傾けることでもある。……神秘的な『自然』の思索に心を安んじて静居し、そして環境全体と同化して、それで満足することの方が、われわれ、少なくともわれわれのうちのある人々にとって、心ゆくまで楽しい事柄なのである。」

鈴木大拙が引用した『森の生活』の「孤独」の章の、次のような一節を

読めば、ソローが日本人読者に極めて近い存在であることに気づくであろう――「折から静かな雨の最中、不意に、自分は自然といふものに、しとしと降る雨の音に、わが家を取まく一切の音と眺めに、平和な恵溢れた交らひを、自分を支へる雰囲気、ともいふべき無限にして説き盡しがたき親しみを感得した……松の一葉々々も自分に好意を見せて、ひろがり張って親しみを寄せた。」

『森の生活』と現代日本

『森の生活』は以前から岩波文庫の一〇〇冊の一冊に選定され、最近では「何よりも若い世代に一度は読んでおいて欲しい本」として選定されたニュー一〇一冊の中にも取り上げられているが、読者の数は限られていると想像される。

かつて『天声人語』（一九八四年一月一三日）は今西錦司の「自然学の提唱」にふれて、「今西さんは『自然科学者』であることに決別し、『自然学者』として生きる宣言をする。自然を細分し、その分野の専門家になったところで部分自然の専門家にすぎぬ。大切なのは全体自然である。全体自然は生きものであり、何十億年にわたって、もろもろの生物をはぐくんできた巨大な母体であり、巨人であり、怪物である。自然をそのようなものとして理解しようというのが自然学だと説く」と述べた後で、『森の生活』の「春」の章の有名な一節――「地球は〔書物の紙葉のように層をなして重ねられ、主として地質学者と考古学者によって研究されるべき単なる〕死んだ歴史の断片ではなく、〔花や果実に先がける木の葉のごとき〕生きている詩である――〔化石した大地ではなく生きている大地である〕」を引用し、他と分離したものではない、全体的な自然の意味を問い直させようとしたことがあった。つまり自然＝地球そのものが生きた有機体という考え方で、従来の人間中心的世界観から比較的新しい概念に属する生物中心的世界観が生まれる。

この記事は日本のマスコミでソローが取り上げられた数少ない例の一つである。ましてや『市民としての反抗』が取り上げられないのは、先のアメリカ人女性の指紋押捺事件に関して顕著であったように、日本の政治的貧困さと無縁ではなかろう。それに比べてアメリカのマスコミを代表するニューヨークタイムズなどでは、しばしばソローを取り上げている。最近でも「ソローの鉄道に乗る」（一九九一年七月一四日）という、興味ある記事を載せているが、単なる旅行記に終るのではなく、ソローの哲学を正確に読者に伝えている。

これは単にお国柄の違いというよりは、日本にはまだソローを受け入れる素地が出来上っていないからであろう。しかし日本でも破天荒な生き方をしたにも拘らず、その反骨性に一本筋が通っていた人物、例えば南方熊楠などが再評価される時代でもあり、『森の生活』が広く紹介された暁には、必ずやその思想は日本に根づくものと思われる。ウォールデン湖で展開されるアメンボーやミズスマシなどの描写に接すれば、多くの読者は日本人の感性そのものであることに驚くことだろう。

例えば最近中野孝次が「大量生産＝大量消費社会の出現や、資源の浪費は、別の文明の原理がもたらした結果だ。その文明によって現在の地球破壊が起ったのなら、それに対する新しいあるべき文明社会の原理は、われわれの先祖の作りあげたこの文化――清貧の思想――の中から生まれるだろう」と述べるその「清貧の思想」とは、「単に貧しいことではない、自然といのちを共にして、万物とともに生きること」という意味でソローの主張する「簡素な生活・高き想い」と通じるものがあるのである。

もっともソローは森の中で花鳥風月を歌う歌人でも、隠遁する聖人でもないことは注意すべきである。『森の生活』の思想は決してなまやさしいものではなく、その内容に至っては経済から宗教、哲学、文学、自然までおよそ人間の生活に関わるすべてのものが詰め込まれている。この意味で、ソローはエコノミストであり、哲学者、詩人、ナチュラリストでさえあっ

た。

我々日本人にとって『森の生活』が馴染めない理由の一つに、その思想というより翻訳上の障害が指摘されるかもしれない。しかしネイティヴ・スピーカーでさえ原書を読むのは相当の困難が強いられる以上、要はそれに向って努力する如何であろう。

現在のような地球規模の環境破壊が続く中で、今『森の生活』の意義が真剣に問われようとしている。自然に恵まれ（日本の森林率は国土の六八％で、先進国中では最大）、自然と共に生きてきた伝統をもつ日本人が、一方ではその自然を破壊してきたのも事実であり、環境問題の深刻さを十分認識しているはずである。この書に接すれば、人間と自然の有機的な関係を再認識して、私たちの生き方そのものを変えようとする勇気ばかりか、自らには不可能とさえ思われる夢を見ることを許してくれる。その夢こそ、現代人の心の糧となって、着実に世を変えてゆくことになろう。

第四章――現代の森の生活

Ⅰ

アーミシュとモルモン

アメリカのペンシルバニア、オハイオ、インディアナなどの州には、現在でも外部との接触を完全に断ち、機械文明を頑固に拒否し続ける、キリスト教の一派であるアーミシュ派の人々が約二万人住んでいる。彼らは農業を基盤にして、今だに一七、一八世紀の衣服を着用し、馬車を交通手段とする。教育制度に関しても独自のものを採用している。日本のような画一的制度を強制する国と違って、アーミシュの生き方そのものが是認されていること自体、いかにもアメリカらしい。

もっとも戒律に従って宗教的に簡素に生きようとするアーミシュの生き方は、ソローの創造的・自律的な森の生活とは一見似て、実は大いに異なるものであることは、もう既におわかりだろう。彼の生き方は、機械文明を「忌避」することにより集団を維持し続けることではなく、それを利用する人々の心の有様（ありさま）を鋭く問い直すことであった。つまり文明が進歩するなら、それに応じて人間の意識の方も成長しなければならないと説くのであり、それが生きる大前提になっている。いつまでも「幼虫状態」のままであってはいけないのである。

ともかくアメリカという国は、その成立過程からして新しい理想共同体を試みるユートピアの実験場を数多く提供してきた。今までに夥しいユートピアが建設され、その多くが挫折して行ったが、その中でも成功と言えるのはモルモン教徒の例であろう。現在ユタ州の州都ソールトレイクシティーに絢爛豪華に聳えるモルモン教の寺院を見れば、ユートピア共同体建設がいかに実現困難であったか知るべくもない。それはただブリガム・ヤングという教祖の専制的指導力では説明できず、モルモン教徒の自我を滅する狂信的な信仰心によるものが大であっただろう。

本章ではソローの森の生活と時を同じくして始まった、彼の友人たちによるブルック・ファームやフルーツランドなどのユートピア共同体運動にふれた後、現代の森の生活について詳しく述べてゆくことにする。

ユートピア共同体

トマス・モアの『ユートピア』（一五一六年）に始まる、既制社会を逃れて理想的な社会を発見しようとする夢は、新大陸発見後、自ら完全な社会を作ろうとする自主的な動きへと質的に変化していった。ユートピア社会を創設しようとする最大の理由は、自ら住む既制社会に対する鬱積した不満や批判がその根底にある。

ソローの生きた一九世紀中葉は、アメリカの産業主義がその矛盾を露呈し始めた頃でもあり、フーリエ主義に基づく社会改良を目指すユートピア共同体建設運動が最も高まった時期に相当する。一八四〇年代だけを取っ

てみても、その数は四〇以上にものぼり、完全に一八四〇年代という時代の一部になっていたのであった。

これらの中には、アメリカに「神の国」を建設しようとする宗教的教義を掲げる、例えばモルモン教徒のような一派もあれば、特に宗派にはこだわらず、ただ純粋に「完全な人間」の生き方を追求しようとした、ブルック・ファームやフルーツランドのような共同体が存在した。

ソローの森の生活も、一種のユートピア実験の一つとみなされるものであったが、他の理想共同体と異なる最大のものは、そこに自然を最も象徴するウォールデンという湖があったことであり、選ばれた人物、すなわちソローひとりしか入れなかったことである。彼はウォールデンで個のユートピア＝個人の人間的完成を求めたのであった。

ブルック・ファーム

一八四一年四月一日、ソロー兄弟が教えていた学校が兄の病気で閉鎖を余儀なくされたまさにその日、コンコードからさほど遠くないボストン近郊のウエスト・ロクスベリーにユートピア共同体、「農業および教育の機関ブルック・ファーム」が創設された。

その設立の趣旨は、「知的労働と肉体労働との間に自然な絆を確保し、できる限り個人の中に思索家と労働者とを合致せしめ……自由で知的かつ教養ある人々の社会を作る。そこではお互いの関係が競争社会の制度の下よりも単純で健全である」ことだった。

自由な競争は破壊の手先、富は共同体に属するなど制度的には多分に共産的共同体であったが、生き方により大きな自由、簡素性、真実性、洗練さと道徳的威厳が与えられていたので、「簡素な生活・高き想い」の森の生活と本質的に一致するものであった。

しかし同じ夢を抱いた人々の中でも、集団性が強調されると、個性の強いメンバーの中には反発する者が当然でてきて、いずれくい違いが生じるのは目に見えていた。ソローはブルック・ファームに誘われたことがあったが、生活の諸問題がそのような共同体という基盤で解決されるとは思わず、断ったことがあった。一方エマソンは文明社会の利点から孤絶する完全主義者たちの共同体は、「避けがたく収容所となるだろう」と懸念していた。

案の上、最初は順調に推移していたかにみえた経営も、経済観念の欠如、労動過重による病人続出などの予期せぬ状況に陥って行き詰まり、その上火災による損失が追い討ちをかけ、六年間続いたブルック・ファームも閉鎖を余儀なくされた。

しかしこれは表面上の理由にすぎず、実際は個性の強い構成員間の微妙な心理的軋轢が累積した結果である。ブルック・ファームの実験は、その高い志は別として、集団＝社会のあり方を根本的に問うこととなった。一部の狂信的な宗教団体が理想共同体として成功する最大の理由は、構成員が自らの個性を滅却して集団のルールに従うことであった。一世紀後のスキナー著『第二のウォールデン（*Walden Two*）』（一九四八年）――ソローの『森の生活』とは似ても似つかない小説である――は、「行動工学」によって集団生活の心理的諸問題を解決しようとした、いわば逆ユートピアの世界だと考えられる。ブルック・ファームにはそれがなかった。逆説的に言えば、ブルック・ファームがつぶれるべくつぶれたのは、かえって構成員の健全さを示していることなのである。

フルーツランド

『若草物語』を書いたL・M・オルコットの父が、ボストン郊外のハーヴァードにある豊かな水と肥沃な九〇エーカの丘陵地を購入し、フルーツランド（Fruitlands）と命名したのは、ここの果樹林の豊かさゆえであった。ブルック・ファームと同じくフルーツランドの理念は、精神と肉体の均衡ある発展を通して、完全な人間社会のモデルを実現せんがためであっ

たが、少々やりすぎた感じがする。

なぜならここで実践された簡素の生活というのは、例えば食事をとってみれば、パンと野菜と果物と水のみの、過酷な菜食主義的食生活であり、バターやミルク、卵さえも禁止されていた。豊富な果実が主食であったが、年中あるわけでもなく、碾き割りとうもろこしの粥が標準食になっていた。衣服に関しては、奴隷労働の産物である綿や、羊からむしり取った羊毛で作られたものは着ず、粗末な麻やリネンの服を着ることが義務づけられていた。これに違反すれば即座に処罰され、ある者は近所の農場で魚の尻尾を食べただけで、魚缶詰の作業に送られた。「尻尾を食べるためには、その魚がまるごと苦しんで死ななきゃならない」からであった。更に畑に肥料を施すことすら、自然を搾取することにつながるということで許されず、ましてや他人を雇ったり牛馬を使うことはなおさらであった。

フルーツランドの一日は夜明けと共に始まる。起床後沐浴して音楽のレッスンがあり、木の実と穀類の朝食となる。正午まで仕事をした後は菜食主義の昼食、午後は「体に休息を与え、心を発展させる」会話があり、夕方戸外作業を終えて夕食となる。夕食後は討論があり、それで一日が終る。

「外的な禁欲が内的な充実のしるしである」とみなすフルーツランドの生活は、「簡素な生活・高き想い」の姿を借りた時代錯誤的な苦行に近いが、当事者たちは真剣に「完全な人間」を夢見ていたのであった。しかしたとえオルコットなどが求めていた「エデン」がここに見出されたとしても、そのエデンが自己否定の上に成立する限り、ソローの森の生活とは似ても似つかぬものである。

あまりに厳しすぎる規律のため、コミュニティー内部から不満が高まり、コミュニティーが自壊するのは時間の問題だったが、それ以前に「フルーツランドの男の住民は、その作物よりも会話を耕し」、オルコットの妻や娘たちが大半の仕事をさせられていた事実そのものに、大きな問題があったのかもしれない。

簡素な生活と高き想いを掲げて出発したブルック・ファームやフルーツランドなどの共同体が挫折した理由は、その経済観念や統率力の欠如ばかりでなく、様々な性格の人間を一つの枠組に押し込めようとすること自体に無理があったからである。半年余りの実験生活を離れる際、失意のどん底のオルコットを救ったのは妻と四人の娘たちの愛情であった。彼女たちこそ彼に与えられた最大の贈物であり、彼が求めていたエデンやユートピアは他になくいつも自分の身近な家庭にあったことを、彼は身にしみて感じたに違いないのであった。

機械によるユートピア

ソローは森に入る三年前、機械によるユートピア実現を目指すエツラー著『自然と機械の力による、だれもが働かないで到達しうる楽園――知識人に訴える』（一八四二年）を論じたことがあった。この書は人間の完成を目指していたブルック・ファームやフルーツランドなどの理想共同体運動とは全く内容を異にするが、テクノロジー文明社会を志向する点において当時の時代精神をよく反映していた。

エツラーは機械力による自然の支配によって「人間生活に関わるすべてのものが、労働することなく、しかも無料で手に入る楽園が一〇年以内に実現する」と言う。確かに産業革命以後、汽車、電信などの発明により、人類の未来は限りなくバラ色に見えた。しかしそのような機械力による自然の征服、それゆえの人間生活の向上がたとえ可能になったところで、ソローにはエツラーの書が肝心要の人間精神の進歩について一切触れていなかったことに不満を覚えた。

実際ここに大きな落し穴があったし、時代の趨勢はソローの忠告に耳を傾けることなく、機械による自然征服へとまっしぐらに突進して行き、その必然的累積的結果が二〇世紀末に生じた地球規模の環境破壊であったことはもはや疑いえない事実である。

「この書の主要な誤りは、安楽や快楽を最大限に得ようと努めることである……私たちはこの外的生活を真に改革したければ、まず内的生活の方も省略してはいけないのである」と述べて、内なる自然（人間性）と外なる自然（外的生活）の均衡ある生き方を提起する。そして最後に「愛は風、愛は潮、愛は波、愛は日光。愛の力は測り難い。愛は馬力に溢れ、止まることなく、遅れることもない。愛は休むことなく、大地を動かし、火を用いずとも暖かく、肉を食べずとも糧となり、衣服を着ずとも身を纏い、屋根がなくても覆いとなる。愛は外に楽園を作るに及ばず、心の中に楽園を作り出す」と付け加えて、愛情こそ機械に優る力をもち、社会を改革する上で欠かせないものであると強く主張して書評を終えるのである。ここに見られるソローの愛の哲学こそ、後のガンジーやキング牧師に通じるものであることは容易に察しがつく。

汽車や電信の発明が一つの文化を形成し、機械文明礼讃の意識を人々の心に植え付け始めた中で、また一方では人間が奴隷状態を強制されている中で、彼の意見は十分に核心を衝いていた。人間の創り出したものがかえって人間存在を矮小化させるという逆説的な文明の進歩の過程は、人間生活から詩的なもの、美的なものを徐々に奪っていった。ソローはそれらを回復すべく、声を限りに人間存在の威厳を訴え続けるのであった。

日本における理想共同体

アメリカにおける理想共同体運動から遅れること約七〇年、日本でも武者小路実篤らによる理想共同体「新しき村」が、一九一八年（大正七年）日向の荒地（現在の宮崎県児湯郡木城町）に建設された。実篤の意図は、宗教的なものでも政治的なものでもなく、純粋な愛と善に貫かれていた。実篤は次のように語っている。「其処〔新しき社会〕では皆が働ける時一定の時間だけ働くかはりに、衣食住の心配からのがれ、天命を全うする為には金のいらない社会をつくらふと云ふのだ。その上に自由をたのしみ、個性を生かさうと云ふのだ。」つまり「新しき村の運動は、人間が人間らしく生きる事を目的にしている運動」なのである。

実篤は比較的早くソローにふれ、新しき村においては、「トロー〔ソロー〕のワルデン〔ウォールデン〕よりはもっと有益なことが示されるべきだ」と語っている。実際『森の生活』の思想は実篤の中に深くしみこんでいる。例えば「始めは出来るだけ簡易生活……始めは自然の許しを得て生活し、しまひには自然と人間と共に生かしあふ生活……村をたてるだけが自分達の仕事ではない。其処で自分達を本当に生かすのが自分達の仕事だ。本当に自己を人間らしく生かしたい為に村をたてるのだ。」

ソローはウォールデンの森の中、湖を前にして簡素な生活と高き想いを実践し、自己完成に努めた。実篤も日向の地で「皆がつまり兄弟のやうになってお互に助けあって、自己を完成するやうにつとめ」たのであるが、ここ新しき村でもブルック・ファームやブルーツランドと同じ問題が生じてくる。確かに「人為的な虚偽な社会制度で息ぐるしくされてゐるのからのがれて、すみのすみまで平和と、公平と、正義と、愛を感じて生きてゆきたい」という高い理想は首肯できようが、共同体を取りまく根源的諸問題は、実篤個人の力をもってしても如何ともしようがなかった。やがて彼は日向におけるあしかけ八年間の新しき村の実践から退くことを余儀なくされた。ただし彼は終生新しき村運動の精神的擁護者であり続けた。

『第二のウォールデン』

既に見たように、理想共同体を維持してゆく上で最大の問題は、共同体を支える経済性と、集団生活に伴う心理的葛藤であった。経済性の側面は、肥沃な地と豊富な労働力（二〇世紀では機械力）によってある程度解決されようが、各個人の心理的側面を解決する即効薬はないように思われる。理想の共同体建設で成功したのは、シェイカーやモルモンなどの戒律と狂信に伴う宗教的団体であった。もちろんこのようなコミュニティーでは、

個人の自由は集団のために犠牲にされるのは言うまでもない。

一九四八年、スキナーが『第二のウォールデン』（*Walden Two*）を出版した時、そのタイトルばかりか内容に至っても衝撃的であった。スキナーは自らが専門の心理学の実験場を、第二次世界大戦直後の理想共同体「ウォールデン」にあてはめ、それをフィクション化したのであった。

ソローに敬意を表して使用された「ウォールデン」という名称から、読者はソローひとりの森の生活をコミュニティーに適用したものかと期待して読むことになるが、『第二のウォールデン』で描かれた世界は、『森の生活』を見事なまでに裏返しした世界であることにショックを感じる。確かに既成の社会を脱出し、別のライフスタイルを求めるという点で共通するものの、決定的な相違は、ソローが個人の人間性を重視したのに対し、『第二のウォールデン』は、人間性を規制抑圧することが全体の幸福と平等獲得に必要だと考えるコミュニティーであったからである。このコミュニティーは、現代のテクノロジーによって経済的な自己充足を達成し、集団生活の心理的諸問題を「行動工学」によって解決しようとする。

J・C・ガレットは『文学とユートピア』の中で次のように説明する。「スキナーの思想は、個々の遺伝的、内面的な素質・要素へは眼を向けず、とりまいている環境、住んでいる社会を完全に操作・操縦することにより、いかなる行動も――従って精神も――自由自在に管理・統制することが出来るとする環境決定論であり、それを可能にするものが現代科学の最先端にある物理工学・生物工学等の枠を結集した行動工学である。」

個人の自発性や自由が抑圧され、個人の変身の可能性が奪われたコミュニティーは、専制以外の何物でもない。第二のウォールデンでは、個人の完成ではなく、共同体の完成を目指し、共同体が個人に代ってアイデンティティー獲得する。ここにはハックスリーの『すばらしき新世界』や、オーウェルの『一九八四年』に見られる、恐るべき逆ユートピアの世界が展開される。

森と文明

ジャック・ウェストビーは『森と人間の歴史』のまえがきで、この数世紀にわたる森林の減少は、ホモ・サピエンスという特殊な種の劇的な増加ばかりでなく、人間による経済組織と資源搾取の形態が、森林に破壊的インパクトを与えていると述べている。

ソローは早くから森林の保護を訴えていた。そのエコロジカルな主張は、もちろん『森の生活』の中にも窺われるのだが、実質的に自然保護運動の先駆的役割を果したのは、彼と同時代のジョージ・パーキンズ・マーシュであった。彼が極めて象徴的な題である『人間と自然』（一八六四年）を書く以前に、人間が環境にどのような影響を与えているのか心配する者は皆無だった。彼は次のように語る点において、既に一〇〇年後を見通していた。

> 人間は大地の表面の形を変えた……森林の破壊、湖沼の排水、農業や産業の手法の活用によって大気の温度や湿度に大きな影響を与えた。大地を覆っていた数えきれぬ動植物が人間の活動によって数が減り、時には形やなかみまで変わり、いや全く絶滅したのもあった。……あらゆる有機物の中で、人間のみが本質的に破壊者であった。……森林破壊が人類最初の自然との調和を破ることになった。

森林破壊は単なる自然破壊にとどまらず、究極的に文明の衰退につながる。高坂正堯が『文明が衰亡する時』の中で、ハンチントンの『気候と文明』を引用して述べているように、気候と土壌に恵まれたローマ帝国が衰退した理由の一つに、皮肉にも多くの人々が生活するために森林を伐採し、牧草地に変えた結果、それまでの肥沃な土地は不毛となり、農業基盤の崩壊につながったのである。

このような森林破壊や自然破壊の背後に、人間の豊かさを求める驕りが

あったことは疑いなく、本来もっていた人間の倫理感や美徳の喪失は、文明を衰退させるに十分である。ソローの『森の生活』の中心は、失われてしまった人間の様々な美徳の回復にあったことは言うまでもないことであり、マッキベンの『自然の終焉』を貫くテーマも、最終的には不遜な文明に対する憤りであった。

日本における自然保護運動も、森林破壊に対する抵抗から始まった。一九〇六年（明治三九年）、神社合祀令が布告され、貴重な神社の森が破壊されようとしていた。南方熊楠にとって森は動植物の宝庫であり、研究の場であったので、自らの生命を賭けて破壊と闘った。中沢新一の言うように、この熊楠の抵抗は、最初は自然に対するナチュラリストの偏愛から出発したが、やがてナチュラリストの狭い視野をはるかにのりこえて、前代未聞の深まりをもったエコロジー思想を展開させることに成功したのであった。

一方尾瀬においても、日本の自然保護の草分け的運動が始まろうとしていた。一八九〇年尾瀬沼西岸に小屋を建てた平野長蔵が、信仰の山としての燧岳や尾瀬の開拓に努めながら、植物乱取・水力発電などの自然破壊に対し、激しく闘かおうとしていた。

森の生活――最初のイミテイター

ソローが亡くなってからわずか六年後の一八六八年、早くも彼の森の生活を真似る者が現われた。ニューヨーク生まれのエドモンド・ホッサムという青年が、コンコードのエマソン宅を訪ねて来て、彼からウォールデン湖畔のソローの住居跡近くに小屋を建てる許可をもらっている。ソローの森の生活を真似た第一号であったが、必ずしも世間受けを狙った自己宣伝的行為ではなかった。この青年の意図は、ソロー同様に自然の中で簡素な生活と高き想いを実践することにあった。

実際のところ、彼はソロー以上に簡素な小屋を建て、そこで神学の勉強に励んでいる。その小屋は、二世紀も前のニューイングランドの植民地時代同然の、丘に穴を掘って作った極めて原始的な住居で、ソローの小屋建築費の半分しかかからなかった。食事に関しても菜食主義を実践し、彼が望んだ簡素な生活と、健康、それに勉強の時間は十分手に入れることができたのである。

もっとも彼の森の生活は、都会に戻ることを念頭にしていたので、（彼は六ヶ月後に去っている）、若者にありがちな一時的逃避の域を出ないものであった。単に自然の中に家を建て、畑を耕して自給自足の生活をするのが「森の生活」ではない。真の森の生活とは、その場所とか滞在期間、独居生活かどうかも問わない。少なくとも文明社会を離れた自然の中で、簡素な生活と高き想いを実践し、見せかけではなく本物に出会うことである。そしてたえず自己完成を目指し、新しい人間に変身して去らねばならないのであり、去ってからも日常生活のおりふしに学んだことを生かさねばならないという高尚な側面をもっている。

この意味でソローの真の後継者はジョン・ミュアであったと言わざるをえない。彼はソローの亡くなった一八六二年に、初めて『森の生活』を読んでいるので、名実共にソローの後継者と言える。ミュアの著書の随所にソローの生き方が反映されている。彼はソローが早くからウィルダーネスを評価しているのに感銘していた。ウィルダーネスとは当時の人々にとって、異端の地であったからである。彼が自然作家として活躍する二〇年間、ソローが事実上の「哲学的文学的ガイド」の役割を果している。彼らが自然に眼を向けたことそのものが、文明にばかり囚われた歴史家たちに痛烈な風刺を浴せることになった。

彼らは森林破壊に不遜な文明の象徴を読み取る。ミュアは「アメリカの森林」の中で、「東海岸の森林破壊を考えると、やがてその地方は丸はだかになるだろう」というソローの懸念を紹介しているが、ミュアの住む西部でも森林破壊は一層深刻さをましていたので、その警告をもこめて読者

に語っているのであった。一八九三年ミュアはソローがかつて過したウォールデン湖を訪れ、「ソローがここに二年間住んだのも無理はない。私だったら二〇〇年、いや二〇〇〇年でも住んでみたい所だ」と感動して述べている。だがこの聖地・聖域も、不遜な文明の進歩の前に、やがて危機にさらされることになる。

Ⅱ

ソローの森の生活を原型とする原始的な孤独の生活実験が、彼が有名になるにつれて増加してきた。それはアメリカは言うに及ばず、イギリス、オランダ、オーストラリアでも試みられている。特にソローが森の生活を始めてから一〇〇年目にあたる一九四五年以降、ソローにならって生きようとする試みが一種の流行とさえなってきた。しかしそれらの多くが短命で、価値ある文学作品に結晶するものは稀であった。そのようななかでも、いくつか注目すべき例が見られる。ここでは文字通りソローの例にならって森の生活を忠実に再現したアンジャー夫妻による『森の中の家――現代のソローの生活』（一九五一年）、文明社会からわずか二週間しか離れていないものの、ソローの哲学を浜辺で実践したリンドバーグ夫人の『海からの贈物』（一九五五年）、及び都会を脱出してアディロンダック山中に住み、現代の不遜な文明を告発してやまないマッキベンの『自然の終焉』（一九八九年）を取り上げ、現代における森の生活の意義を検証することにする。

アンジャー夫妻の森の生活

「一〇〇年前ある男が本を書いたので、私たちはウィルダーネスへ行った」で始まるアンジャー夫妻の『森の中の家――現代のソローの生活』は、アウト・ドア・ライフの人気が高まるにつれて多くの人々に読み継がれてきた。その副題にもあるように、一世紀前に『森の生活』を書いたソローの簡素な生き方が現代でも可能かどうかを実際に試してみる冒険であった。

ボストンで演劇関係の雑誌の編者をしている夫ブラッドフォードと、ミュージカルのディレクターである妻ヴェーナの二人は結婚して二年になるが、身をすり減らすような都会生活に嫌気がさしていた。そんな時ある一冊の古ぼけた本が彼らに訴えかけた。それが彼らの一生を変えることになるソローの『森の生活』であった。この古典ともいえる著書は、「聞いたことはあるが読まれたことは殆どない」類のものであったが、夫妻には「いわゆる文明の進歩が狂気じみてくるにつれて、その価値が高まる」ように思われてならなかった。ソローが彼らに語りかける。

> 大衆は静かなる絶望の生活を送っている。彼らは病気の日に備えて貯えをしているから病気になり、彼らの絶えざる不安と緊張が殆ど癒し難い病気となっている。それは愚者の生き方だ。しかも他に選択がないものと思っているようだ。
>
> 文明の真只中でも、原始的生活をしてみるのはいくらか利益があることである。

夫妻は多くの人々の憧れの都会であるボストンと演劇関係の仕事を捨て、ウィルダーネスに行ってソロー的生活を試みる決意を固めた。それが若さと情熱ゆえの決断だったとしても、彼らが真摯に生きることを欲する限り、一体だれが止められようか。彼らはウィルダーネスで現代におけるソローの生活の可能性を探るばかりか、できることなら現代の森の生活の楽しさを多くの人々に伝えたい希望をもっていた。これが最終的に彼らの森の生活を続けて行く上での財政的基盤となりうるのであった。

問題はどこへ行くかである。彼らが住んでいたボストンの西約三〇キロ

メートルの所に、ソローが住んだウォールデン湖がある。しかし二〇世紀中葉のウォールデン湖は、かつてのような面影はない。「暑い日曜日にもなると、水泳を楽しむ人々でごったがえす。若者は女の子を追いかけまわし、ホットドッグやポテトチップスを食べている」有様である。もはやここには聖地としての湖は存在しえないし、森の生活は不可能である。

彼らは自給自足の生活をする上でも、住む土地が無料で、狩猟や釣りで食料が楽に手に入り、木を切ることで燃料の問題が解決される場を考えていた。だがこのような地がはたしてあるのだろうか。不安は尽きなかったが、彼らは再度ソローの言葉に耳を傾ける。「人は夢の方向へ自信をもって進み、そのような生活を送るように努めれば、通常では思いもよらぬ成功を収めることになろう。」ともかく彼らは夢の方向へ一歩踏み出す決意を固めた。そうしなければ、何も展望は開けてこなかったからである。

ちょうど当時アラスカ・ハイウェイが新聞紙面をにぎわせていた。夫妻はここに自らの理想の地を求め、ボストンから二四〇〇キロメートルも離れた、カナダの辺境の地へと二月に旅立って行った。旅立つ際、彼らが携行したものは、地図、マッチ、サングラス、蠟燭、長靴、本、釣具、大工道具、生活用品、筆記用具、それにラジオ、タイプライター、カメラと銃などであった。これを一世紀前ソローが森の中の小屋にもち込んだもの――ベッド、テーブル、机、椅子、鏡、火箸、湯沸し、鍋、フライパン、柄杓、洗い鉢、ナイフ、フォーク、皿、コップ、スプーン、瓶、ランプ、本、インクスタンド、ペンと紙――と比べると、いかに一世紀の間に最低限必要なものでさえ増えているかがよくわかるが、これらでさえ現代から見れば少なすぎる。もっと多くのもの、例えば衛星放送受信可能なテレビや、どこでも連絡可能な無線機があればずっと快適な生活が送れるのにと考える者は、森に行く資格はない。森の生活の基本は、物に囲まれた文明の人工的生活からの脱皮であり、簡素な生活が絶対条件なのであった。ソローは銃や時計などの文明の利器を捨てて、森の中へ入ったのであった。

一週間にわたる列車の旅の後で着いた所は、鉄路の果てる最果ての地、カナダのブリティシュ・コロンビア州ドーソン・クリークであった。彼らが目指す地は、ここからなおも二〇〇キロメートル以上奥に入ったハドソン・ホープから、更に一〇キロメートル行った荒野の只中にあった。

ここには探鉱者が見捨てた丸太小屋があり、そこではだれもが無料で住むことが許されていた。ソローは他人の小屋を購入して、それを再利用する形で自らの小屋を建てたのに対し、夫妻の方は無料で住居を手に入れたのだった。

まもなくアンジャー夫妻は、これらの丸太小屋を壊して自分達の新居造りに着手する。ソローの『森の生活』にも小屋建築の詳しい描写がある。「人が自分の家を建てるという、そんなに簡単で自然な仕事に従事しているのに出くわしたことがない」ほど稀になった家造りを、夫妻は始めたのである。森の生活は、まず自らが住む家を自分で造ることに始まると言ってよいだろう。

夫のブラッドフォードは、「家を建てることは、ものの原点に戻ること、少年の頃の、小屋を建ててみたいという憧れがそれを証明する」と語る。このようにして建てられた二人の新居は、奥行六メートル、幅三・六メートルの大きさで、ソローの小屋の二倍の広さとなったが、夫婦で住むのだからやむをえなかった。小屋の建築費は四八ドル一六セントで、ソローの二八ドル一二セントより高くなったが、「当時より物価が四倍になっていることを考慮に入れれば、ソローの二倍の広さの家を半額で建てたことになる」と自慢げに語る。

アンジャー夫妻の『森の中の家』は、ソローの『森の生活』同様、小屋建築の話から、自然の風景、孤独、村、読書など広範囲にわたっているが、彼らの描写に顕著に見られるものは、夫婦間の強い絆であった。例えば真冬に家の近くを探索中に巻きこまれた雪崩の際に、負傷して動けなくなった夫を支えたのは妻の夫に対するおもいやりであった。夫は二重遭難を恐

れ、動けぬ自分を残して、明るいうちに早く立ち去れと妻を促すが、妻は「ここに残る」と言い張る。結局のところ、彼らは近くに野宿地を見つけ、ことなきをえたが、酷寒の地で互いに励まし合う夫妻の姿が読む者の胸をうつ。

ソローは生活に必要なものは、衣・食・住・燃料であると言ったが、「私はこれらに相互のおもいやりを付け加えたい。ここブリティシュ・コロンビア州北部で、私は私が必要としているのと同じくらい夫が私を必要としているのがわかった」と妻が述べる下りは、独身者ソローの森の生活とは随分異なるように思われる。しかし案外こういったシーンが読者には歓迎されよう。いや実際、この夫婦の愛こそ別の意味でソローの言う「人生の本質的な事実」の一つかもしれず、独身者ソローの窺い知れぬところだった。たとえ彼らが「高い霊妙な生活」を営むことができなくても、それに等しい二人の愛情が続く限り、森の生活は挫折することはないであろう。

この雪崩の例にあるように、ウィルダーネスの生活に危険はつきものだが、二人はおおむね満足していた。食事に関しては、ソローのような厳格な菜食主義はとらず、大自然の恵みを最大限に利用する方針だった。そのため時には熊を殺して食べたこともあったが、もちろん不必要な殺戮はしなかったことは言うまでもない。

夫のブラッドフォードは、以前メトロポリスで周期的な神経性消化不良に悩まされていたが、ウィルダーネスに入ったとたんになくなってしまった。これは食事とは関係のない、精神的なものが原因だったのである。こうした体験から、「人間は自らが誤って作った文明の人為的な速さや不安から圧迫されることなく、自らのペースで生きるべきである」というソロー的結論が導き出される。

ソローの森の生活は言うに及ばず、他のいかなる理想共同体や実験生活においても、経済的な問題を避けて通ることはできない。北極に近いここでもそのことが夫妻の頭痛の種であった。これが解決されない限り、彼らの森の生活は成立せず、あの嫌悪した文明社会へ戻って行くことを考えなければならなくなるのである。

ソローは豆畑を耕し、豆を売ることや日雇い労働で生活の不足分を稼いだが、夫妻の場合、極寒地ということで農業はままならず、またウィルダーネスに日雇い仕事は存在しえなかった。ソローよりハンディキャップの多い大自然の中で生活することは、予想以上に困難なことだったのである。

彼らはその点は既に見越してのウィルダーネス行きを決行していた。なぜならば彼らはウィルダーネスの生活をまとめて記事にし、それを雑誌社に売ろうと試みていたのであり、実際のところ、それが実を結んだのである。最初の原稿料を受け取った時の妻の心境は、「望まない限り、ウィルダーネスの家を離れなくてもよくなった」ということであった。後にはウィルダーネス観光のガイドを勤めることで、経済的問題を解決しようとしたが、お金の問題は北極であれ、南極であれ生きている限りどこへ行ってもつきまとってくるのであった。

ウィルダーネスの生活には、経済的な問題の他にも心配なことが幾つかあった。一つは健康のこと、もう一つはアクシデントのことである。病院は一〇〇キロメートル離れた所にあるだけだったが、幸いなことにここに来てから病気ひとつしていない。しかしこれからも病気に患らないという保証はなかった。アクシデントには既に一度遭遇したことがあったが、その他にも山火事や野獣との遭遇がある。彼らはウィルダーネスに生きる知恵として注意深くあり、自己信頼の生活をする必要があることを悟った。彼らはウィルダーネスに来て一まわりも二まわりも成長していった。

しかしすべてに終りがあるのと同じように、彼らのウィルダーネスの生活も四年間で終りを告げた。それには「親類の願いや経済的な問題」が関係していたかもしれなかったが、夫妻はソローにならって、「私は森に入ったのと同じくらいもっともな理由があってそこを去った。どうも私には

生きる幾つかの別の生活があって、そこの生活にはこれ以上時間をさくことができないような気がしたからである」と語り、ウィルダーネスを去って行った。

だが一旦ウィルダーネスの生活を経験した二人にとって、落ち着きのないこせこせした都会生活はなじめるものではなかった。彼らはソローがウォールデンの森の生活をやめた後でも、しばしばウォールデン湖を訪れていることを知り、再度極寒の地へと戻って行ったのである。

ソローの住んだウォールデンは、アンジャー夫妻が住んだウィルダーネス（原始自然）ではないことは注意しておかねばならない。ウォールデン湖はボストンからわずか三〇キロメートルしか離れておらず、現在では十分通勤圏内にある。当時としても既に湖畔に沿って鉄道や街道が走り、三〇分も歩けばコンコードの村の中心に辿り着くことができた。そこは小規模ながら教会や銀行を初めとする都市の体裁をなしていたのである。

ウォールデンを去った後、ソローが『メインの森』や『コッド岬』で追い求めたのは、確かにアンジャー夫妻が移り住んだウィルダーネスに違いなかったが、『森の生活』では文明と自然という相対立した二つの世界の調和や均衡が探求されている。

この姿勢はリンドバーグ夫人やマッキベンにもあてはまる。彼らは最低限の文明との接触を保ちつつ、かつ自然の生活を満喫し、「簡素な生活と高き想い」の生活を実践する。いわば彼らは文明と自然の境（ちょうどウォールデンも文明と自然の境界にあった）の上にあって、批判的に文明を受け入れようとするのであった。ここは文明生活にありがちな疎外や抑圧から解放させてくれるばかりか、原始自然のもつ不安定な諸要素の犠牲になることもない、いわば理想的な「中間地点」なのである。

アンジャー夫妻はこの中間地点を一気に越えて、ウィルダーネスに向った。そこには自然はあるが、文化は殆どない。夫妻は読書を通して「高き想い」を維持しなくてはならなかったが、それにも限度がある。しかし『森の中の家』は、アメリカ人好みの独立独行の精神が如何なく発揮された書であり、単なるアウト・ドア・ライフの入門書以上のものを含んでいる。

Ⅲ

リンドバーグ夫人の浜辺の生活

ソローの『森の生活』が出版されてからほぼ一世紀後、彼の思想を伝える『海からの贈物』がリンドバーグ夫人によって書かれた。この本は一九五五年度の、ノンフィクション部門のベストセラーの第一位を占め、彼女の最もよく知られた随筆となった。

『海からの贈物』は、作者が女性であり母親であること、空間と時間が海と二週間という際立った相違が見られるものの、その哲学的思想において二〇世紀の『森の生活』と呼んでも過言ではなく、『森の生活』の真髄を見事に二〇世紀中葉にあてはめたものであり、二〇世紀を生きる多くの人々に強い感銘を与えた。

従来言われているように、この書は女性の生き方を描いただけでなく、多分にソロー的生き方が反映されている。ソローの森の生活を一語で要約すれば、「簡素な生活と高き想い」になることについては既にふれたが、リンドバーグ夫人の二週間の島の生活も、まさしくこの思想と合致する。

リンドバーグ夫人は父親が外交官や上院議員を経験したほどの名家の出、言わずと知れた、「セントルイス魂」号に単独で乗り込み、大西洋横断無着陸飛行で名を成したアメリカン・ヒーローのひとりチャールズ・リンドバーグの妻で、彼女自身も女性飛行士の草分け的存在である。また五人の子の母親として、かつ長男が誘拐後殺害された悲しむべき体験の持主でもあるが、『海からの贈物』には著名人としての経歴には一切ふれられておらず、妻であり母親であり作家である一女性の生き方が紹介されている。

彼女がいつどこへ行ったかという、具体的な地名や時期について、詳細

は言及されず、ただある年の春、ある島に二週間滞在した体験を貝のイメージに触発されて書き綴ったのが『海からの贈物』である。

住んだ場所と住んだ目的

リンドバーグ夫人は「何マイルも続く海で囲まれ、本土と繋がる橋も、電信も、電話もない島」に二週間の休暇で訪れた。それまでのコネティカットにおける彼女の生活には、空間が余りにも不足していた。彼女の控え帳には空白箇所は殆どなく、一日のうちで何もしないでいられる時間は少なかった。彼女は自分だけの時間を手に入れるために島へ行ったのであった。

島において彼女は「どれもが十分な時間と空間の枠の中に置かれている」ことを知った。ちょうどソローが「私は自分の人生に幅広い余白をもつことを愛した」と語るその余白こそ、島における十分な時間と空間であったのである。彼女の島の生活は自然流である。自動車があるわけでもないので、買物や郵便を取りに行くのに自転車を利用し、寒い時は流木を集めて薪とする。海を風呂代わりとし、生活上やむなく出るゴミは、穴を掘って埋める。彼女はこれらを少しも疎まず、むしろ「私の生活に平衡を保たせてくれた」と語る。ソローのように豆畑で農業を実践するという時間的ゆとりはなかったが、形式化された煩雑な日常仕事から解放されると、そこには本来の自己を取り戻す行為で満ちていたのだった。星を見つめたり、貝を調べたり、鷺を見る時間もたっぷりあった。都会生活は「誤った価値観で迫って来る。価値は、質ではなく量で、静寂ではなく速度で、沈黙ではなく騒音で、考えではなく言葉で、美しさではなく所有欲で計られる。」しかしここ海で見かけるものは、すべて本質的なものばかりであった。

彼女の一日は、微風と潮騒の音で目覚めることから始まる。その後で浜辺を散歩し、海で泳ぐ。それはソローがウォールデン湖で身を清めたのと同じく、「洗礼を受け、再生した」境地であった。湖や海に象徴される水のメタファーが二つの作品に共通する。ソローが湖から得たものは、純粋性、神性、永遠性、豆畑から得たものは「誠実、真理、単純、信仰、無垢」であった。海は「忍耐、信念、寛容、質素、孤独、断続性」を教えてくれる。これらが海からの贈物となるのである。

もちろん海からの直接の贈物は、本書の各章を飾るほら貝、つめた貝、日の出貝、牡蠣、たこぶねなどの貝である。これらの貝の特性を通して、彼女は現代生活に欠けているものを示唆する。

軽い朝食をとった後、午前中は執筆に専念する。遅い昼食後は再び浜辺を散歩し、夜は「人と考えや感想を分け合い、話をする時である」と述べて、休暇の後半に訪れて来た妹と話をする。それを終えると、寝る前にもう一度浜辺を散歩する。夜空には星がきらめいている。「歩き疲れると、砂の上に仰向けに寝そべって空を見上げ、空の広さに私たちも拡がってゆくような感じになった」と語るが、この自然と一体となる境地こそソローがウォールデンで探求したもののひとつだったし、マッキベンの『自然の終焉』の結末は、神秘的な夜空を眺めるシーンであった。

リンドバーグ夫人によれば、二〇世紀中葉のアメリカ人女性は戦争や貧困により時間的にも空間的にも狭い世界に追いやられる、世界の他の女性よりは自由を得ているが、それでも夫や子供の衣食住のことばかりか、家族の健康や子供の教育、友人関係などで忙殺される「煩雑な生活」を強いられている。「私たちを統一ではなくて分裂に導き、恩寵を援ける代りに、私たちの魂を死なせる」のである。生活が煩雑であるという問題は、男女を問わず「現代文明そのものに課せられた問題」と捉えるに至り、彼女が『海からの贈物』の中で描こうとしたものが、文明と個人の関係という大きなテーマであることを知る。

彼女は現代文明の煩雑さから逃れる解決策として、ソローと同じく生活を簡素にすることを提唱する。彼女はほら貝の簡素な美しさから、「自分の生活を簡素にして、気を散らすことの幾つかを切り捨てる」決意をする。「浜辺での生活で第一に覚えることは、不必要なものを捨てることである。

……どれだけ少ないものでやっていけるかであって、どれだけ多くかではない」と語るに及び、森の生活の必要条件としての簡素な生活を彼女が志していることを知る。

彼女が滞在した家は、彼女自身が建てた家ではないが、天井と壁が目立つほど室内には物は置かれていない。家具は殆どなく、電話と湯わかし設備もない。石油コンロが一つあるだけで、寒い時は流木を集めて暖房にあてる。「カーテンもこの家にはない。外から見られないでいるのには、家の周りに生えている松だけで十分である」と語る下りは、『森の生活』の中、「カーテンの費用は全然必要ない。覗きこまれるものとしては、太陽と月より他になく、彼らが覗きこむのはむしろ歓迎である」を連想させる。絨毯はあるにはあったが、彼女は片付けている。これはソローに言わせれば「悪の始まりを避けた」ことになろう。人は物をもてばもつほど貧しくなるのであった。一方彼女は自然の恵みを巧みに利用する。文鎮の代りにウニ、ペン置にはおおの貝を利用する。思えばソローも漆喰を作る際、湖岸の白砂を使った。

リンドバーグ夫人の思想が極めてソロー的であるというのは、こうした簡素生活の背後にしっかりした理念――「私は私自身と調和した状態でいたい――『恩寵と共に』ある状態で生きてゆきたい……プラトンの『パイドロス』に出て来る『外面的な人間が内的な人間と一つになることを』というソクラテスの祈りと同じもの」――を追い求めている点である。

彼女は「生活が何かと気を散らさざるをえない中で、どうすれば全体的(whole)でありうるか」、「どうすれば人間を幾つにも分割する圧力に対して自分を守れるだろうか」と述べ、多くの日常生活に伴う断片化・分裂化に対して個の全体性とか統一性を強調する。

ソローの森の生活が、断片的・分裂的状況を強いる中、天上的なものと地上的なものの均衡のとれた統一的人間像――外なる自然と内なる自然の統一のとれた全体的人間像――探求にあったことを考慮すれば、『森の生活』と『海からの贈物』が意図するものは根源において驚くほど一致するのである。

更に彼女が次のように述べるに至って、彼女が望ましい「中間地帯」に位置することを知る。彼女は「無人島に一人で住むことも…尼の生活をすることもできない。……私にとっての解決は、この世を完全に捨てることでも、完全に受け入れることでもなく、その中間のどこかで釣り合いを取り、あるいはこの両極端の間を往復する一つの律動を見つけることである。孤独と接触、退避と復帰の間に吊るされた振子になる」ことであると述べて、本当の自己を回復するためには時々の空間的移動が必要と語る。

この際人が取りうる望ましい立場は、彼女が述べているように「中間」、あるいは両極端を往復する「振子」の象徴で表現されている。これを『森の生活』にあてはめてみれば、ソローの住むウォールデン湖は「天と地の間に位置し、両方の色を帯び」ていると描写されたように、望ましき中間地点であり、かつ自然と文明との境＝中間に存在しえた。更にソローはウォールデンの森を去ってから、両親の家に一生落ち着くことになるが、その間に原始自然を求めて何度も旅している。これは精神の停滞を逃れるためであり、「振子」の理論で説明できる。

現代人にとって、すべての文明の利点を捨て、自然の中に移り住むことは不可能であろう。アンジャー夫妻はそれを実践したが、ソローは必ずしもそれは望んでいなかった。ソローが森を去った最大の理由は、小屋と湖の間にできた「踏みならされた道」を見つけたことだ。自然の中ですら、同じ所に居続ければ意識は停滞するのである。したがって望ましいのは、一つの所に留まるのではなく、文明と自然の両方の世界を往復することにある。文明に汚されたと思った時には、本来の自己を確認すべく自然へと向い、自然の浄化作用を受けて再び文明世界へと戻って来る。この繰り返しをソロー同様リンドバーグ夫人も望むのであった。

リンドバーグ夫人が単身で島に出かけ、浜辺の家で簡素な生活を試みた

のは、すべて自己を取り戻すためだった。海の簡素な生き方に自己をオーバーラップさせ、自らに付着した見せかけの文明の垢を洗い落し、本来の自分に出会う旅だったのである。

確かにリンドバーグ夫人の場合、僅か二週間の島の生活では、人類が望む原初の状態への一時的な回帰にすぎないかもしれないが、たとえ一時的な回帰にしても、都会を離れ、人為的なものの少ない自然の中で悠然と生活する利点は多い。海や森や川は文明の汚染を受けることが比較的少なく、そこでは都会に渦巻く欲望や虚栄、不安や懐疑に左右されることもない。

それは本質的なものに出会う旅である。たえず振子のように文明と自然を往復することで、人はおぞましき精神の汚濁とか倦怠から解放され、新しい均衡のとれた人間へと変身することができる。人は自分自身を取り戻すためにも、繰り返し文明と自然の間を往復せねばならぬのであり、「森の生活」とはあくまでもその象徴的な例なのである。

孤独

いわゆる多くの「森の生活」の中で共通するものを一つ挙げるとすれば、おそらく孤独であろう。ソローが言うように、孤独とは「人と仲間を隔てる空間の距離」ではなく、「最も上質の沈澱物のみが周囲に積み寄せられる」時なのだ。ここには見せかけや偽善は一切なかった。

リンドバーグ夫人はシギ、千鳥、ペリカン、カモメなどの浜辺の鳥を見て、そういうものと「一種の繋がり」を感じ、「地上と、海と、空の美しさが私にとって前よりも意味があって、私はそれと一つになり、いわば宇宙の中に溶け込んでゆく」と語る。このような自然との一体感の表明は、ソローの森の生活の中でも幾度となく見られたものであるが、彼女が「中核、あるいは内的な泉を再び見つけるのには孤独が一番よい」と述べているように、孤独は自己を取り戻させ、諸々の関係の中心に自己が位置することを教える。

「女にとっては、自分というものの本質を再び見出すために一人になる必要があるので、その時見出した自分というものが、女のいろいろな複雑な人間的な関係の、なくてはならぬ中心となる」と述べる時、それは自らが主体性をもって初めて得られる確かな位置である。

夫婦の関係

ソローの『森の生活』になくて、『海からの贈物』に顕著な傾向は、人間関係の基本的な単位である夫婦の愛情を、その結婚当初から中年、及び熟年期にまでわたって詳細に論じているところであろう。もちろんソローも人間関係について多くの箇所で語っているが、彼の最終的な拠り所は、自然や神との関係にあった。

リンドバーグ夫人も最終的な拠り所を神との関係で捉えているのは確かだが、ソローが全く触れていなかった夫婦の関係を真正面から取り上げ、現代がかかえる復雑な問題の一つを解明しようとする。したがって二〇世紀中葉に生きる女性の視点から語り、その女性の視点を強調すれば、『海からの贈物』は多分にフェミニズム論とは無関係でなくなる。

彼女はそれまでの彼女自身の問題から、全八章のうち三章を使って、自我がどう他者と意義ある関係を結ぶべきか、いかなる人間関係が望ましいかという普遍的な問題に挑戦する。この背景には日頃から彼女自身多くの結婚生活の破綻を目撃し、夫婦の絆を第一に考える彼女にとってやりきれない状況があったからであろう。女性の役割を伝統的な妻、母、主婦に限定する立場をとる考え方は、一九七〇年代以降のフェミニズムの理論からすれば保守的以外の何物でもなかろう。しかし一九五〇年代という時代的制約にも拘らず、女性としての自己定義を試み、そこから新しい女性の生き方や自立を説く、先駆的役割は評価されてもいいと思われる。

孤独の中で主体的自己を確立し、自分の本当の姿を見つめ直すことは、ある意味で易しい。それは本人自身の自努力によるところが多分にあるか

らである。しかしいざ他者との関係になると、夫婦関係ですら結局は自分ではない自我をもつ相手と向い合わなくてはならず、そこには必然的に行き違いや摩擦が生じる。多くの理想共同体が失敗したのはこのためであったことは既にふれた。リンドバーグ夫人は、アメリカ社会の中で崩れつつある夫婦の関係に焦点をあて、望ましい夫婦の絆を再構築しようとする。夫婦の関係は幾つかの段階に分れ、彼女はそれらを「日の出貝」、「牡蠣」、「たこぶね」と呼ぶ。

日の出貝

夫婦関係の初期の段階は、純粋でシンプル、重荷になるものはなく、『完璧な融合』が可能である。だが生きて行くうちに生活が次第に複雑になるに従って、相手との関係が初めの頃とは違ったものとなり、銘々の役割に即した関係が生じる。やがて二人の間に誤解が生じ、離れて行ったり、新たに他の人を愛することで解決をはかろうとする事態に陥る。

リンドバーグ夫人に言わせれば、これは「安易な考え方」である。彼女によれば、生活上の爽雑物の下に埋められ、本質が隠されたためにこうした事態を招くのであって、それを覆っているアピアランス（見せかけ）を取り除けば、夫婦の関係は正常に戻ると語り、子供、家、仕事、日常生活の束縛をすべて後にして、旅に出かけるかして二人だけの時間をもつようにと薦める。

リンドバーグ夫人の夫婦関係に対する基本概念は、「恒久的に純粋な関係というもの」は存在せず、「すべて生きた関係は変化し、拡張しつつ、常に新しい形を取ってゆかねばならない……一つの固定した形はなく、その各段階にそれぞれの関係がある」ことである。

したがって二人の自我がそれぞれ成長し、成長することは離れることをも意味するが、彼女は樹木を例に取って次のように説明する。「確かに成長するというのは分離することであるが、それは木の幹が育つに従って枝や葉に分れるのと同じことである。木はやはり一本の木であって、その各部分が一つになってこの木ができている。そして二つの別々な世界、或いは二つの孤独は、各自が一つのものの貧弱な半分だった時よりも多くのものをお互いに与えることができる。」

牡蠣

結婚当初の夫婦の姿を象徴する「日の出貝」は「美しいがはかないものの永遠の価値をもつ」のに対し、夫婦の中年期を象徴する貝は牡蠣である。「不格好で美しくはないが、その適応性や根気強さには驚かされる。」ただ一つの結びつきしかない初期の恋愛の絆は、嵐などで容易に切れてしまうのに対し、中年の段階に達した夫婦の絆は、「愛でできた織物」となっているので、そうやすやすと切れることはない。

「この織物はただ一種の愛で作られているのではなく、最初の憧憬に満ちた愛、それから次第に生じた献身の情、そしてそのいずれもをたえず支えている友愛から成り立つ」と述べ、サン・テグジュペリの「愛とは互いに相手の顔を眺め合っていることではなく、同じ方向に二人で一緒に眼を向けること」を引用しながら、夫婦は「毎日を一緒に過して同じ方向を眺め、その方向に一緒に努力する」ことからこの愛の織物は作られると語る。『森の中の家――現代のソローの生活』を書いたアンジャー夫妻などは、リンドバーグ夫人の強調する望ましい夫婦の典型であろう。

もっともこの時期、青春期と同じく不満、焦躁、疑惑、絶望、憧れなどの兆候が現われる。青春期にはそれらは「成長に伴う苦痛」にすぎず、若さとヴァイタリティーで乗り切ることができたのに対し、この時期、多くの人々が「精神的沈滞、神経衰弱、酒、恋愛、仕事へと逃避する。」だがこうした兆候は、世俗的野心や物質上の邪魔の多くから解放されて、自分が今まで無視し続けてきた面を充実させる時が来たと解せねばならないのである。

たこぶね

日の出貝、牡蠣の段階を経て、夫婦の関係を象徴する貝が「たこぶね」である。雌のフナダコが子供を育てる時のみ使用するこの貝は、子供が成長して出て行けば捨てられてしまう珍しい貝で、普段そう簡単に浜辺で見付けることは難しいが、「美しい貝でそれが呼び起す影像も美しい。……これは人間と人間の関係が次に達すべき段階の象徴……二人の成熟した人間の、そういう人間としての出会い」を表わす。

リンドバーグ夫人は、リルケの暗示する理想的な男と女の関係に共鳴する。「今までのような服従と支配、或いは所有と競争の伝統的な型ではなく……各自が成長する余地も自由もあり、そしてお互いに相手の解放の手段になる」という対等な共存関係を築き上げようとする。その際特に女性側の自立が肝要であることを強調する。

ソローは『森の生活』の中で、自らを不断につくりあげてゆく自己完成を主題に据え、天と地、精神と物質の二元的世界において調和と均衡のとれた全体的人間像（whole man）を探求したが、『海からの贈物』の主題も、結局は「人間の完成」に要約される。なぜなら本文中何度となく登場する「whole, wholeness（完全に自らと調和した状態）」、そして「whole woman（調和と均衡のとれた女性）」という言葉がそれを端的に物語っているからである。

このような自己と調和した男女の間にすら距離はある。しかし再度リルケの言葉を引用して、「二人の間にある距離を愛するに至るならば、それは互いに相手の全体を広い空を背景に眺めることを許して、二人だけのまたとない生活が始まる」と語る。ここにあるのはより大きな二人をつつむ愛である。夫婦がそれぞれ完全な自己を目指して努力してゆけば、二人のくい違いはもはや違いではなく、むしろそれは相補的なより大きな愛へと昇華してゆくべき類のものなのである。

リンドバーグ夫人は、人と人との関係は踊りと同じ様式でなければならぬと言う。それは二人が同じリズムに従い、一つの形を生み出し、それによって銘々が支えられている。腕を組もうと、向き合おうと、背を向けようとその一つ一つを区別する必要はない。「一つの固定した形はなく、その各段階にそれぞれの関係がある」のだった。この踊りのリズムは、更に大きな振子のリズムを暗示する。

「二人は同時に分け合うことと孤独、親密な感情と抽象の境地、また個別的なものと普遍的なもの、身近なものと遠いものの間を往復する振子のような大きなリズム」にも調子を合わせなくてはならない。振子のようにこういう相反する両極端を往復することが、二人の人間関係をより豊かにするのである。

振子の象徴については、既に「ほら貝」の章で見た通り、自分自身を取り戻すための、作者のとりうる最善の立場であったが、このことは人間関係にもあてはまったのである。リンドバーグ夫人は、浜からもち帰った貝を見つめては、「海から引いてはまた戻って来るのを永遠に繰り返している」ことを思い出す。それは寄せては返す波のリズムであり、湖の干満であり、振子のメタファーを暗示する。

彼女は「潮が満ち引きするそのどの段階も、波のどの段階も、そして人間的な関係のどの段階にも意味がある」ことが浜辺の生活で学んだ一番重要なことであると語って、「たこぶね」の章を終えるのであった。

島の教訓

人間を断片化し、分裂に招く都会生活の圧迫に対して、どのように自己を守ればよいのか。これがリンドバーグ夫人の最大の悩みであり、その解答を求めて島にやって来たのであった。島そのものは海を隔てたエデンであり、アルカディアに相当する。そこはウォールデン湖と同じく何の見せかけもない真実に満ちた所で、人はここに住みさえすれば、その特性に触れることができるのである。彼女が島で学んだ教訓を次のように列挙する

時、ソローの森の生活と共通する項目が多いのに驚かされる。

人生に対する感覚を鈍らせないために、なるべく質素に生活すること、体と、知性と、精神の生活の間に平衡を保つこと、無理をせず仕事をすること、意味と美しさに必要な空間を設けること、一人でいるために、また、二人だけでいるために時間を取っておくこと、精神的なものや、仕事や、人間的な関係からでき上がっている人間の生活の断続性を理解し、信用するために自然に努めて接近すること。

島の眼

いかなる理想郷に居ようと、精神のマンネリ化は必定である。これはソローの森の生活でさえ、実際に起ったことであり、その象徴的な兆候は、自らが踏み固めた轍（わだち）にあった。それを見てソローは森を去り、一旦はコンコードの実家に落ち着くのであるが、毎日の散歩と、時々の野生を求める長期の旅によって、自己の均衡を維持し続けた。

リンドバーグ夫人の立場もソローと同じものであったことは、既にふれた。しかし現実の彼女にとって、妻として、母として、作家として、一市民としての生活から脱出することは、独身者ソローほど容易なことではなかったと思われる。ただ彼女には島から持ち帰った貝がある。それらの貝は、島の価値基準による意識的な選択――「島の眼でものを見ること」――を思い出させ、日常生活における彼女の拠り所となるのであった。

浜辺を振返って

リンドバーグ夫人の島での生活を彼女自身の言葉で要約すれば、「簡素な生活、内的な完成、人間関係の充実」になろうが、彼女は最終章「浜辺を振返って」では、それらが「かなり狭いものの見方ではないだろうか」と疑問を投げかけている。

確かに他との関係を殆ど遮断した島での生活を通して、彼女が執拗に追い求めた「個の完成」、wholeness の状態はまがりなりにも得ることができた。それはすべて彼女自身の意識的な努力によって可能であった。ところが彼女はそれだけでは満足しない。彼女はそうした状態を社会の開かれた状況の下で更に完全なものにしたかったのであった。なぜなら「我々から一番遠い輪に当る所で生じた大緊張や、対立や、災難も我々に影響せずにはおかなくて、我々はそれに無関心でいることはできない」からである。彼女は個人も世界的な動きと無関係ではいられないことを悟り、個人の完成を追求すると共に、「世界的な感覚」も身につけなければならないと語る。これは多分に当時の冷戦構造が影響していたことと思われる。

リンドバーグ夫人は、「未来への競争で現在は脇へ押しやられ、自分から離れた場所のことが取り上げられ、自分が現にいる場所は無視され、個人は多数によって圧倒されている」現状を鑑み、現在最も脅かされているものとして「ここ、今、個人」を挙げ、生活の中でそれらを取り戻そうと主張する。

このような主張は、特に「今、ここ」を強調する現実主義的対応は、今までの詩的な理想主義を掲げた姿勢と大きくくい違いを見せ、海からの贈物であった貝とはあまり関連性がないように思われるが、彼女にとっては社会における女性の位置づけが強く念頭にあった以上、現実主義的対応もやむをえなかったのかもしれない。

去った理由

ソローは森を去った理由の一つに、「生きるべき幾つかの別の生活があって、ここの生活にこれ以上時間を割くことができないような気がした」と述べたが、リンドバーグ夫人も海の教え――忍耐・信念・寛容・簡素・孤独・断続性――を思い出しながら、「しかし私が行ってみなければならない浜辺は他にまだ幾つもあり、貝殻もまだ幾種類もある」と語るに及

んで、両作品の内容上の類似は著しい。常に覚醒を求める洞察者にとって、停滞は許されず、振子のリズムのように機会あるごとに新しいウォールデンなり、島を一生涯見出してゆかねばならないのであった。

Ⅳ　マッキベンの森の生活

自然の終焉

マッキベンの『自然の終焉』（一九八九年）は衝撃的であった。三〇年前、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』を通して、自然の破壊・環境の悪化を窺い知っていたものの、それはあくまでも極地的なものであり、汚染の原因を取り除けば自然は再生するはずのものだと誰しも楽観視していた。事実日本においても水俣や四日市で発生した公害も、その汚染源がつきとめられれば、事態は飛躍的に改善された。これらの局地的な在来型汚染は、汚染源さえ特定されれば、比較的処理しやすかったのである。

ところが『自然の終焉』は、そのような楽観主義を吹っ飛ばすのに十分であった。マッキベンは現在の深刻な状況を次のように語る。

〔カーソンの取り上げた〕ＤＤＴの場合とは量だけでなく質の点でも違う。二酸化炭素などの温室効果を生みだすガスはあらゆるところから生じる。したがって、あらゆるものにたいして対策を講じないかぎり、この問題を解決することはできない。……我々が築きあげた産業システムの大きさと複雑さを考えれば、誰が見ても当然の早急な改革さえ具体化するのは至難である。

雨が大地を潤し、草木が芽吹く。野花が咲きみだれ、道行く人を楽しませる。この自然界のごく普通の営みが、同じ自然界の一員であるホモ・サピエンスという種の、わずか二〇〇年たらずの活動によって根本的に変質させられようとしている。

従来思われていたほど自然は強靱なものではないという認識、地球的規模での環境破壊は、もはや純粋な森の生活を許さないという悲劇的認識は、悲しさを通りこした、いわば有無を言わさない状況である。地球温暖化、酸性雨、オゾン層破壊、森林破壊、海洋汚染、砂漠化……どれをとってもそれらの加害者が、ある特定の地域の一企業ではなく、私たちの三度の食事や自動車通勤、エアコンの使用、着ている服など、私たち一人々の日常生活そのものに深く関わっているという現実が、多くの読者の良心をいたく傷つける。産業革命以降、人類の活動エネルギーの累積が、ソローが『森の生活』の中で象徴的に描いた自然の回復力、復元力を越えてしまった結果生じた事態である。

現在の地球的規模による環境破壊の現実は、小惑星の衝突、ビッグバン、核兵器の出現と同じものとみなされる。いや「核兵器の危機は、少なくとも人間の理性に希望をつなげる――我々は核兵器の不使用を決定できるし、事実その削減を行い、おそらく廃絶することもできるだろう。」しかし現在の環境の悪化は、地球に生存するすべての人々の活動に由来しているので、問題の次元が根本的に違い、ここに難しさがある。

すべての問題が複雑かつ相乗的に働き、その解決策を見出すのは困難を極める。確かに現世代ではその兆候が現われているだけで、切迫した気持にはならないかもしれない。しかしマッキベンが著書で予言した事態は、将来必ず訪れて来るのである。

『自然の終焉』は、地球の温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、森林の破壊など一連の環境問題を告発した書に違いないのだが、著者が現代文明の象徴たる摩天楼の聳えるニューヨークの生活を捨て、人里離れた森の中に移り住み、簡素な生活を実践しながら、しかも人類に対して高き想いをもち続ける、そうした彼の生活にソローをオーバーラップさせるのは難しく

あるまい。彼には生活の伴侶がいるとはいえ、彼の生き方は極めてソロー的であり、実際彼はしばしばソローを引用している。彼の生活は二〇世紀末の「森の生活」と呼ぶにふさわしいであろう。

『自然の終焉』は全体で五章――「新しい大気」、「自然の終焉」、「破られた約束」、「不遜な対応」、「より困難な道」――から成り立っている。一、二、四章は科学的な事実による自然破壊の現状説明であり、タイトルにも使われた二章に彼の哲学が読み取れる。彼の森の生活の様子は、全章にわたって有機的に語られている。ソローの『森の生活』の第一章として「経済」の章があり、森の生活を取りまく外的文明の説明があった。それと同じように、『自然の終焉』の第一章「新しい大気」は、この作品のプロローグをなし、地球的規模で進む自然の変質が衝撃的に語られる。

地球温暖化

自然は途方もなく時間をかけ、ゆっくりと歴史を形成してきた。しかしマッキベンはこの自然に異変が生じている事実を、科学ジャーナリストの眼で、客観的な数値を挙げながら読者に説明する。まず彼は地球の大気の異変＝地球温暖化に注目し、その要因として二酸化炭素などの増加を指摘する。

地球温暖化とは、太陽光線を吸収した地表から出る熱エネルギーが大気中に放射される時、この熱エネルギーを二酸化炭素などのガスが捕足して、温室のように地球を暖める現象＝温室効果によってひき起される。

大気中に存在する一定の量の二酸化炭素などが地球を暖めたおかげで、火星のように寒い惑星とはならなかった。「多少の温室効果は有益で、植物はその暖かさでよく繁茂する。」しかし「問題はその程度である」とマッキベンは語る。

地球の大気は窒素と酸素が大部分で、二酸化炭素は現在ごく微量の〇・〇三五％だが、温室効果の心配は、この〇・〇三五％が〇・〇五五％ないしは〇・〇六％に上昇するというもので、数値としては小さい。しかしそれはすべてを変えてしまうのに十分である。

化石燃料の使用、森林の焼払いなどで二酸化炭素は大気中に放出される。また牛やシロアリの腸にいるバクテリアや、ゴミ捨て場からもメタンが放出され、二酸化炭素と同じく地球温暖化の要因となっている。

二酸化炭素やメタンの濃度が上昇したからといって、私たちのそれこそ命である酸素がなくなるというわけではない。しかし人体に影響がなくても、「大気の変化は天候を変え、そのために人の住む環境も変わる」のである。また地球温暖化によって、旱魃が起り、農業に大きな影響があると予測される。更に海面の上昇により、スリランカの南西約六〇〇キロメートルに位置するモルジヴは一〇〇年後には地図から消えてしまい、「そこには船にとっての危険海域として記されているだけかもしれない」ことにもなるが、当時国にとっては笑い事ではすまされない。日本でも海面上昇における提防の嵩上げなどで多大な出費を余儀なくされ、当然国民生活にも多大な影響が及ぶことになろう。

酸性雨

現在の地球的規模での環境汚染を示す最も象徴的な出来事は、二酸化炭素などの増加による目に見えにくい地球温暖化よりは、近くに汚染源がないのに目の前の森林が枯れてゆく状況に遭遇したことであろう。この原因は、使用した化石燃料が大気中に放出される時、硫黄酸化物や窒素酸化物が様々な化学変化を起して、硫酸や硝酸に変り、雨となって降る。その雨は酸性度の強い酸性雨となる。

酸性雨は色も味も臭いもないが、風によって運ばれることで、国境など容易に越えて行く。日本に降る酸性雨の原因が中国にあることはよく知ら

れている。酸性雨は、現在の地球的規模の環境問題に国境は存在しえないことを教えてくれる。

オゾン層破壊

現在の環境問題で今一番注目を浴びているのは、オゾン層破壊の問題である。プロローグでも述べたように、一九八五年南極上空で発見されたオゾン・ホールの出現は、衝撃的であった。地上一〇～五〇キロメートルの成層圏に存在するオゾン層は、本来太陽からの有害な紫外線を吸収し、人体や植物を守る役割を果してきた。

このオゾン層が、冷蔵庫やクーラーの冷媒、半導体の洗浄、スプレー缶の噴射用ガスに使用されているフロンやフロン化合物によって破壊されつつある事実が判明した。オゾン層が破壊されることによって、皮膚がんや白内障が増加し、一方農作物の被害も懸念されている。「オゾン濃度が二〇パーセント減った場合、日光に二時間肌をさらすと水ぶくれが生じることになる」とマッキベンは警告する。

もちろんこのような事態に対して、世界各国が手をこまねいて見ていたわけではない。『自然の終焉』出版後、フロン全廃に向けて、国際的意見が一致したことは評価できよう。ただそれをもってしても、フロンは分解しにくく、オゾン層の減少は今後一〇〇年間は続くのである。

オゾン層破壊は、在来型の汚染に似て、汚染源が突きとめられれば比較的処理しやすい。酸性雨も、浄化装置を取り付ければ、事態は改善するかもしれない。しかし地球温暖化はそれらをもってしても防ぐことはできぬのである。

人間の営み

二酸化炭素の増加、酸性雨、オゾン層の破壊などの地球的規模の環境破壊の帳本人は、よりよい生活を求めてきた人類である。マッキベンは「世界のほんの一部における五〇年ほどの人の営みが、世界をくまなく変えつつある」と語る。彼の脳裏にたえず去来する疑念は、「人間の対応、つまり自然以後の世界でも従来の自然な生活様式を維持しようとする、実に人間らしい試みが、まったく新しい結果を生む」のだということである。現在のような「自動車を走らせ、工場を建て、森林を伐採し、エアコンを動かす」ライフスタイルを追求する限り、また最大の問題である人口を抑制しない限り、人間の営みから生じるエネルギーの総量は幾何級数的に増加し、自然は死滅する。その中でたとえ姑息な手段で人類が生きのびたとしても、マッキベンにとっては生きるに値しない惑星となる。

人間の生活様式や経済活動がすっかり大気を変えてしまったのである。マッキベンの比喩を借りれば、「我々は一〇〇年間美酒に酔ってきたが、今やドクター・ストップがかかった――これ以上飲み続けると肝臓がもたないのである。」

こうした状況下、私たちは何を手掛りにして生きてゆくべきものだろうか。マッキベンは「祈りも法律も通じない。大気の変化を防ぐには、何十年も前からの人類全体が行ってきた行為を清算しなければならないだろう」と語る。これは私たちの文明を、それまでの資源浪費型から、地球環境と共存できる文明へと質的に変換させなければならないことを意味する。私たちは二〇年前、ローマ・クラブが発した声名「成長の限界」に耳をかさなかった。そのつけが今訪れたのであり、万一再度マッキベンの主張に耳を傾けなければ、私たちは最悪の事態さえ覚悟しなければならなくなろう。

ともかくマッキベンの生活をつぶさに見てゆくことによって、もし可能なら一つの解決策としての「森の生活」の意義を検討することにしよう。

森の生活

マッキベンの森の生活について述べることは、アンジャー夫妻やリンド

バーグ夫人の自己信頼の生活――個人の努力によって困難を克服する姿勢――とは異質の、「森の生活」という優雅な響きとは全く逆の、もはや個人の力ではどうしようもないダーウィニズム的恐怖を感じる。この一五〇年という人類の歩みは、ソローが訴えた自然の回復力を徹底的にうちのめして余りあり、人間が完全に自然を支配したことを決定的に証明する。人間の手に染まっていない自然は、もはやこの地上には存在しえないという虚無感、それと裏返しの人間の傲慢に対する激しい憤りが、彼の森の生活の中で交錯する。

マッキベンはハーヴァード大学卒業と同時に『ニューヨーカー』誌で署名原稿が書けるほどの優秀なジャーナリストであった。しかしだれもがうらやむそのスタッフ・ライターとしての職を惜しげもなく捨て、ニューヨーク州北部にあるアディロンダック山中に移り住み、現在妻と犬と共に簡素な生活と高き想いの生活を実践している。

彼が移り住んだアディロンダック山地は、「一九世紀末に伐採を行わない森林というものを思いうかべた少数の人たち」によって守られたものである。「前世紀末に、初めて環境意識が急激に高まり、ニューヨーク州は広大な面積の土地を買い始めて、そこを『永久に野生のままにする』と宣言し、林業者も宅地開発業者も入れないようにした。その結果、この地域は幸運な例外として、再森林化されて修復された地域となり、生まれ変わったウィルダーネスの地となったのである。」

もっともこの地は一年の大半が雪で覆われ、農業には不向きな不毛の地であることに変わりなく、文明生活を望む人々にとっては敬遠される荒地なのである。

マッキベンが移り住んだ家をどのようにして手に入れたのか、その価格や広さに関しては一切述べられていない。しかし自然に囲まれた森の中の一軒家である点は、ソローと共通する。だが一世紀半の文明の進歩は両者の生活の差を際立たせる。

例えばマッキベンの家にはソローの時代になかった電気が通じ、タイプライター、コンピューター、ラジオ、石油ストーブが設置され、ファックスでニューヨークと繋がっている。更には鉄道がソローの時代を象徴したように、現代文明の象徴たる車を、ホンダの小型車とはいえ所有している。もちろん銀行口座をもっているのは言うまでもなかろう。

このように見てくると、マッキベンの生活は極めて文明的だと思われるかもしれないが、他の多くの同時代の人々と比べて遥かに少ない物で生活していることに留意すべきである。ファックスに関しては、それが「環境保護の立場からも問題のない、優雅な通信手段――先端的な省エネ方法――だと考えてのこと」である。二〇世紀の便宜は享受しながらも環境に優しい生活を意識的に実践している。例えば「ドライブ旅行は控え、家の近くをサイクリングする」、「薪で風呂をわかす」、「最新式の二重のはめこみ式ガラス窓を取りつける」、「暖房は薪で、室内の温度は一二度に保つ」、「車を使う回数を減らす」、「畑で野菜作りを実践する。」夫妻の生活はかつて流行したディンクスとは似ても似つかぬことがわかるであろう。

もっとも子供がいない点は共通する。いやマッキベン夫妻は子供をつくらない決心を表明する。私たちは彼らの子供こそ、次世代を担う、環境意識に目覚めた大人になってくれるだろうと勝手に期待するのだが、そうした期待も彼らの決意を翻すことは不可能である。

読者には意外に思われるこの告白の裏には、マッキベン自身、現在を取り巻く難問の、実現可能な解決方法の一つとして人口抑制を取り上げているからである。彼は「人口の安定化なくしては、森林伐採を制御したり化石燃料の使用を削減するといった最も手近で明白な目標さえ、達成はおぼつかない。かりにエネルギー効率を倍に上げたとしても、エネルギー利用者の数が倍に増えればどうなるか――計算は容赦がない」と語る。人間一人が生まれて死ぬまでのエネルギー総量は、天文学的数値になるであろう。ちなみにアメリカの詩人ゲイリー・スナイダーもマッキベンと同意見

で、『野生の実践』の中で人口抑制の必要を説く。彼によれば、現在の世界の人口の1/10の約5億人（一六五〇年頃と同じ）ぐらいが、野生生物も含めて、共生できる望ましい人口規模である。

しかし彼らに子供をつくらないと決意させたのはそれだけではない。彼らが子供の頃見なれた自然、「夢と希望をはぐくんだ世界」がもはやこの地上には存在しえないことを悟ったからに他ならず、変質した自然を子供には見せたくなかったのだ。このようなマッキベン夫妻の悲壮な決意を、ひとりよがりと誰が非難できようか。このように彼らをしむけた責任は、文明の進歩に加担し続けてきた私たち全員にあるはずである。

マッキベンはソローの森の生活で要した「必要にして十分な額の約四〇〇倍の金で暮している」――ソロー自身の統計によれば、八ヶ月間の生活費は建築費込みで約六二ドルであった。それを年収になおして四〇〇倍すれば、約三万七千ドルになる――とやや自虐気味に述べる。貨幣価値が異なることや、夫婦で暮していることなどを考慮すれば、簡単には比較できないが、多いことは確かであろう。

しかし「私は今使っている額の半分の金でやっていける」とも語り、自ら進んでライフスタイルを簡素にしようと努めている。できるだけ自らの欲望を減らしてゆくことは、環境に負担をかけない生き方に通じる。森の生活は自然に対して謙虚になるようにと教える。

森に行った理由

マッキベンは森に行った理由として、最初「山に登るのに便利だから」と語る。なぜなら「どれほど都会に住み慣れても、人間にとって自然は大きな意味をもっている」からであった。しかしその自然が人間の手によって変質させられ、人間の刻印が押されている以上、「逃避するために森へ行く」こと自体意味がなくなる。

それでも彼は「一番恐れて逃たかった人間は自分自身だった」と語って、「もう一度森に入りなおす。」彼の説明によれば、彼は一年に車を六万四千キロメートル走らせたことがあり、ソローの必要にして十分な額の四〇〇倍の金で暮している自分――「独立した永遠の世界を、科学博覧会の会場に変えてしまった愚行に加担した」自分――が醜く見えて、それからどうしようもなく逃れたかったのであった。

だが森の生活は自分から逃ることを許さず、むしろ自分を再度見つめなおさせる。森の生活の意義は、そこで行われる簡素な生活を通して、自己を見つめ、本来の自己を取り戻す機会を与えることである。マッキベンはこの森の中で、見せかけの自己から脱却して、本来の自己のアイデンティティーを確認しようとする。

だがソローの森の生活から一世紀半も経過した以上、ソローの見出した自然は脅かされている。ここアディロンダック山地に降る雨はレモンのように酸っぱく、降り注ぐ日光とて、破壊されつつあるオゾン層を貫通して来る危険極まりない光となっているのが現状である。

「自然のままの土地の端」に位置するマッキベンの家からは、森の木を伐採するチェーンソーの音が聞え――ソローの時代は斧の音であった――空には低空飛行訓練をする空軍ジェット機の音さえする。近くのアディロンダック湖では週末ともなると、水上スキー用のモーターボートが湖面をわがものがおに走り回る。散歩に出れば、至る所に酸性雨で枯れた木が見つかる。もっともその汚染源はオハイオ州やケンタッキー州にあるのだった。

ソローの生きた時代は「我々がいようといまいと大気の組成が変わりない状態」だった。しかし雨ひとつとっても、もはや独立した神秘的な存在ではなく、「人間の活動の一部になってしまった……この雨には人間の烙印が押されている」のであり、私たちは「かつて美しい野生の花があったところに、温室という人間の創造物を建ててしまった」のだった。

その絶望感、その裏返しとしての人間の愚行に対する思いはたえない。

マッキベンは読者に自然の意義を問いなおさせる。

自然の意義

人間の手による自然の変質、それに伴う自然の概念の変化が『自然の終焉』の主題である。原始的野生的自然に人間の手が加わり、全くの人工的自然になってしまったことに対する驚きと、同時にかけがえのないものを失ってしまった喪失感が全体を貫いている。

一三〇年前、環境保護運動の先駆者であったジョージ・パーキンズ・マーシュが、「季節の循環とそれに伴う気温や昼夜の長さの変化、様々な地域の気候および大気と海の全盤的な状態と動きは、大部分が宇宙的な要因によるもので、もちろん我々の力の及ぶところではない」と述べたことが、現在ではしらじらしく感じられる。しかし現在のような地球的規模での環境破壊は、マーシュ、ソロー、ミュアらの予測を遥かに越える異常なものなのであった。

マッキベンは現代の人々の間で「自然の必要性に対する意識が稀薄になっている」事実に危惧し、自然の不変のリズムを人間の意識の中に取りこむことが、最終的に人間による自然の支配を思いとどまらせるに違いないと考えた。これは多分にソロー的思考である。

彼が「自然は事実であると同時に観念的でもあり、何らかの意味で神と結びついている」と言及した時、『自然の終焉』は単なる環境破壊の現状を告発するプロパガンダの書ではなく、人間の生き方そのものにメスを入れる哲学の書となる。

マッキベンは自然のもつ意味として、秩序・調和・永遠性・不滅性を挙げる。したがって自然の終焉とは、自然の概念の終焉であり、それは神の死を意味する。いや神は教会の中で生きのびたとしても、自然の中の神は死んだのである。

ソローがウォールデン湖で、ミュアがヨセミテ渓谷で、リンドバーグが島で見出したものは、恐れ多いほどの神の存在感ではなかっただろうか。ルソーやゲーテがその多忙な人生の中で、終生植物観察を続けたのは、自然の中に宿る神々しい存在ゆえであった。彼らにとって自然を観察することは、ひとえに自分自身を無限に完成してゆくことに等しかった。

過去二〇〇〇年間、聖書の一節――「地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生きものをすべて支配せよ」――に象徴される、人間の手による自然の支配がなされ、産業革命以降そのスピードが加速された挙句、人間は「神と対等、いやその挑戦者となり、神の創造物を破壊する力をもつに至り」、「科学は神に代って多くの人々を導く概念になった」のである。

人間が創造者となった象徴的な出来事と言えば、遺伝子工学によって創られた新しい生命体であろう。マッキベンは自然破壊の背後に人間の高慢さ――人間がものの中心にあり、したがってどんなに好き勝手なことをしてもよいとするイデオロギー――を見て取る。この「人間が支配者である」という意識の中に、彼は現在の諸問題の原点を見出している。

人々が現在のような生活を続けて行けば、広島や長崎の原爆と同じくらいの破壊をし続けることになると言われている。これに対して楽観主義者たちは、将来テクノロジーの画期的な進歩により、こうした問題はすべて解決されるだろうと考える。

確かに太陽エネルギーの効率のよい摂取で、ガソリンを使用しなくてもよい車が走り、電気も太陽発電で無尽蔵に手に入る時代が訪れるかもしれない。更にはバイオテクノロジーによって食料増産が可能となり、人口増にも対応できるようになるだろう。森も再生し、動植物も元の住み拠へ戻って行くことができるだろう。

確かにこれはありえない話ではない。だがマッキベンに言わせれば、これはもはや自然ではなく変質した自然、「消えることのない人間の刻印を帯びている」自然だと言う。もはやここにはエマソンやソロー、ミュアが

考えていた人間の生きるモデルとしての自然は死滅しているのであった。

「自然がもはや元の自然でなくなった地球で生きるのはどんな感じがするか」と語る時、マッキベンの胸のうちの悲しみがどれほど深いか窺い知れる。彼は現在のような地球規模による環境汚染からは、「森へ移り住んでも逃られない」ことは重々承知している。もはや一五〇年前のソローの時代とは違い、「個人的な解決方法はない。意識に目覚めた子供たちを育てれば、彼らが少しずつ世界を変えていくだろうと言っても、そんな時間的余裕はない」のである。「大多数の人々が変わるように説得しなければならない」、「驚異や神聖さを感じる心を再び養う」と述べる時、本書の意図が環境破壊の現状を通して、人間のあるべき姿は何かを問おうとしていることを知る。

確かにマッキベン自身「レイチェル・カーソンがＤＤＴの危険性について警告した本を書かなかったら、誰かがその危険性に気づいたころにはもう手遅れになっていたことだろう。彼女は問題を指摘し、対策を示した。そして、世の中の流れが変わったのだ。この本も、彼女の著書と同じ道を行かねばならない」と述べているが、『自然の終焉』は環境問題の告発の書にとどまるのではなく、むしろソローの『森の生活』が人間の神性の復活、人間の再生を描いたのと同じく、マッキベンの狙いは人間の精神の覚醒にあったと思われるのである。

不遜な対応

フロンや酸性雨に対しては、まがりなりにも対策がある。フロンは私たちの産業基盤にどうしても必要という物質ではなく、代替が可能。酸性雨に対しても、煙突に浄化装置を取り付ければよい。「基本的にはこの問題は、ＤＤＴ規制や、コルステロールを下げるために卵を控えることと同じである。しかし地球温暖化の問題は、そのような対策では解決しない。」

私たちは化石燃料なしで生活できなくなっているからであり、そのシステムから遠去かるのは死に等しいからである。現実的対応策として、燃費の大幅な向上、家庭のエネルギー消費の大削減、化石燃料に対する課税、その他原子力発電や太陽発電の活用がある。しかしそれでもなお、これらの措置は温室効果をもたらすガスの蓄積を緩和するにとどまり、抜本的な解決策とはならない。

地球温暖化の脅威の中で切り札として登場してきたのが遺伝子工学であり、どんな環境でも生きてゆける新種を創り出し、人口増に伴う食料不足を解消する「打ち出の小槌」と崇め奉られている。「従来の生活様式、経済成長を維持するための頼みの綱となる方法」なので、多くの人々がこぞって歓迎する。

しかしマッキベンに言わせれば、遺伝子工学とは「生物圏全体を人類という種の利益となるように変える」もので、「この地球を支配したいという、とどまるところを知らぬ欲望」に他ならないのである。

遺伝子工学について不信の念を隠さないのは、遺伝子工学が、彼が恐れていた自然の概念を徹底的に破壊するからである。クローニングされた木を見て、誰が神を思い出そうか。例えば鶏肉の場合、人間にとって不必要な頭、羽根、翼さえもない胴体だけの鶏肉が異様な姿で店頭に並べられているのが思い浮かぶとマッキベンは言う。

彼はこのような人類のとる高慢な態度、すなわち人間中心的世界観を「不遜」と呼び、その文明を「不遜の文明」と称す。今まで見てきたように、彼が繰り返し警告してきたことは、自然に対する人類の不遜な態度である。この姿勢が改まらない限り、たとえ姑息な手段で生きのびたとしても、それは人間としての威厳や尊厳を犠牲にして成立するもので、生きるしかばねに等しい。私たちはすべてのものに対してもっと謙虚であらねばならない。そのような姿勢から、生物中心の世界観が生まれるに至った。

謙虚の哲学

マッキベンは最終章「より困難な道」の中で、物質的な豊かさと安楽さを提供してくれる管理された世界を「轍（わだち）」と呼び、ソローの有名な「大衆は静かなる絶望の生活を送っている」という言葉はこの轍を指していると語る。

ソローは小屋から湖にまでできた自らの足跡＝轍を自らの精神的停滞の跡とみなして、森を去る決心を固めたが、マッキベンによれば、多くの人々はこの「轍」が好きなのである。「ソローの感化で、学生は人里離れた湖畔でキャンプ生活を試みるが、やがて普通の社会に戻って行く。そしてこの轍にとらわれる。」「我々はものをいくらでも手に入れるのが好きなのだ……世界は、二〇世紀末の西欧諸国の大半の人間にとって、なかなか住み心地がよい。湖のほとりでキャンプ生活をするヒッピーの数が多くないのはそのためだ」と皮肉る。

現代世界の支配的原理は、経済成長は善であり、組織的な人間活動の正しい目的であると考える。だがマッキベンにとってソローの森の生活の意義は、「人間が生きるためにいかにわずかなものしか必要としなかったか」ということである。生活水準をはかるのは、ＧＮＰでもエネルギー消費量でもなく、もっと質的な向上でなければならぬ。既にシュマッハーは二〇年前に『小さきことは美しきこと』の中で、「必需品の簡素化と削減」を唱え、「究極的に紛争と戦争の原因となる緊張をなくすことができる」と訴えたが、ローマ・クラブの『成長の限界』同様、私たちは耳をかさなかったのであった。

「残された自然とより親しい関係を築き、できることなら自然に回復の余地を与えるような代案」はないものだろうか。マッキベンはミュアの哲学にその手掛りを探る。

> 我々の目には獰猛で残酷に見えるアリゲータだが、神の目には美しい。……アリゲータや蛇などが生まれつき我々に反感を抱かせるとしても、彼らは不可思議で邪悪な存在などではない。花の咲き乱れる原野で幸福に暮しているのであり、堕落を知らず、悪を知らない神の家族の一員として、天にある天使や地上にある聖者に与えられるのと同じやさしさで慈しまれているのだ。

マッキベンはミュアの中に、地球は生物それ自身のために重要であるという生物中心的世界観を見出す。更に彼はミュアの伝統を受け継ぐ現代作家としてエドワード・アビーを挙げ、彼の『モンキーレンチ・ギャング』に魅了される。この小説は、主人公がアリゾナ砂漠を貫通する道路建設工事を中止させようと、実力行使にでる話である。

これはあくまでも小説の中の話であったのに対し、アビー流の哲学的ラディカリズムを行動に移そうとする戦闘的な環境保護グループ「アース・ファースト（地球が第一）」がフォアマンによって設立された。このグループはシンボルマークにモンキーレンチ〔スパナの類〕をふりかざしたものを使用し、そのモットーは「母なる地球を守るために一歩も妥協しない」ことである。

今までの環境保護グループが、「持続的成長」と「未来世代に残す遺産である自然を守ること」のバランスをとる必要性を論じているのに対し、アース・ファーストは生態防衛のためなら、法を犯すこともやぶさかではない。彼らの目的は「地球は我々が利用するための資源だということを改め」、「野生の世界を、自然界を、人間のいない世界を守ること」なのであった。

マッキベンはフォアマンが提唱する「深いエコロジー」に共鳴する。従来のエコロジーがややもすると先進工業国の人間中心的な世界観を基本的に受け入れているのに対し、深いエコロジーは「西洋文明に対する根本的挑戦」状をつきつける。ふりかえれば、これはソローの『森の生活』その

ものなのであった。

深いエコロジーは、物質的・経済的成長の代わりに簡素で品位ある物質的ニーズを、消費志向の代わりに足りるだけの分でまかなうことを提唱する。「最新流行の服をもつことは美意識の問題、趣味の問題だとして正当化する理由はいくつもある。」車や子供をつくることに関しても同様である。だがそうした理由も「このような欲望が自然界に与える負担の重さに比べれば薄弱なものだ。この点をはっきり認識することができれば、我々の考え方はおのずから変わってくるかもしれない」と語る。

マッキベンはソローやガンジーの生き方が指針になると言う。「彼らが自らの生き方をもって如実につきつけた挑戦は、彼らが語ったり書いたりしたことよりもはるかに破壊力がある。あのような簡素な生き方が彼らにできた以上、我々にできないと言ってみたところでむだである。」

そのようなソローだが、彼の存在意義が現代で薄れつつあることをマッキベンは懸念する。「ソローの文章はますます価値と重要性を増していったが、彼の言葉がわからなくなり、洞窟に描かれた絵の意味が我々にわからないのと同じように、彼の考えが未来人にとって意味不明となる日が足早に近づきつつある……やがてソローは何の意味ももたなくなるであろう。」ソローは大学卒業後から死ぬまでの二五年間にわたって膨大な日記を書き綴った。その中には発見した鳥や植物、渡り鳥の時期や当時の気象までことこまかく書きこんでいる。しかし気候が変われば、それこそ何の意味もなくなるのである。

それに伴って、自然の感化を受け、自らの倫理性や美意識が問い直されることはなくなるのだろう。だが考えてみれば、こうした人間の基本的美徳が失われること自体、最終的に文明の衰退につながることは必定である。それは太陽発電でもバイオテクノロジーでも救いえないことであることを肝に銘じなければならぬ。私たちは文明の原点としての『森の生活』に繰り返し戻って、常に自らを完成させてゆかねばならぬのである。

これからの将来に希望があるとすれば、それはただ一つ、人間の理性の力しかない。マッキベンは次のような素晴らしい比喩で将来を語る。真に人間に理性があるのなら、「自らの意思で自らに制限を課し、自分たちを神々とする代りに、神の被造物にとどまることを選ぶことができる。これは何という偉業だろう。最大級のダムをつくるよりはずっと難しいだけに、はるかに感銘の深い仕事である。」

人間の刻印を免れた神秘的世界は夜空だけしか残されていない。夜空の星々を見つめれば、ナチュラリストのジョン・バロウズの言うように、「自分が取るに足りぬ存在である」ことを悟らされる。マッキベンは「我々に必要なのは、人間とはかかわりのないものによる慰めなのである」と述べて筆を置く。彼は人類の英知にかすかな希望をつなぎながらも、自然の終焉を前にして残された自然を静かに敬い、自然に殉じる決意を胸に、森の生活を続けるのである。

注

本論は「簡素な生活・高き想い――森の生活」のプロローグ、第一章、第四章である。

参考文献（新聞、雑誌類は本文中に記載しているので割愛した）

プロローグ
ソーロー著神吉三郎訳『森の生活』（岩波文庫、一九五一）
ソーロー著富田彬訳『市民としての反抗』（岩波文庫、一九四八）
ブライアン・トーカー著井上有一訳『緑のもう一つの道』（筑摩書房、一九九二）
高田宏『物と心の履歴書』（講談社、一九九二）
チャールズ・A・ライク著邦高忠二訳『緑色革命』（早川書房、一九七二）
第一章
ロバート・ダウンズ著本間長世他訳『アメリカを変えた本』（研究社、一九七二）

Robert B. Downs, *Books That Changed the World* (Mentor, 1983)
George Hendrick, "The Influence of Thoreau's "Civil Disobedience" on Gandhi's *Satyagraha*" (*NEQ*, 29, 1956)
ガンジー著蠟山芳郎訳『自叙伝』(中央公論社、一九六七)
M・L・キング著雪山慶正訳『自由への大いなる歩み』(岩波新書、一九五九)
ウィリアム・R・ミラー著高橋正訳『マーチン・ルサー・キングの生涯』(角川文庫、一九七二)
Wright Morris, *The Territory Ahead* (University of Nebraska Press, 1978)
ルソー著今野一雄訳『孤独な散歩者の夢想』(岩波文庫、一九六〇)
尾島庄太郎『イェイツ――人と作品』(研究社、一九六二)
Walter Harding et al., *Henry David Thoreau : Studies and Commentaries* (Fairleigh Dickinson University Press, 1972)
E. B. White, "Walden–1954" in *Walden and Civil Disobedience* (Norton, 1966)
レイチェル・カーソン著青樹簗一訳『沈黙の春』(新潮文庫、一九七四)
諏訪優『ピーター・ジェネレイション』(紀伊國屋書店、一九六五)
ケルアック著中井義幸訳『ジェフィ・ライダー物語』(講談社文庫、一九八二)
ガルブレイス著鈴木哲太郎訳『豊かな社会』(岩波書店、一九七〇)
E・F・シュマッハー著斎藤志郎訳『人間復興の経済』(佑学社、一九七六)
デイヴィッド・E・シャイ著小池和子訳『シンプルライフ』(勁草書房、一九八七)
Duane Elgin, *Voluntary Simplicity* (William Morrow and Company, 1981)
アース・ワークス・グループ著土屋京子訳『地球を救う50のかんたんな方法』(講談社、一九九〇)
John Elkington et al., *The Green Consumer* (Penguin Books, 1989)
E・V・ウォリナー著宮永孝訳『ジョン万次郎漂流記』(雄松堂、一九九一)
Katsuhiko Takeda, "Thoreau in Japan" in *Thoreau Abroad* (Shoe String, 1971)
Leon Edel, *Henry D. Thoreau* (University of Minnesota Press, 1970)
鈴木大拙著北川桃雄訳『禅と日本文化』(岩波新書、一九四〇)
鈴木大拙著北川桃雄訳『続禅と日本文化』(岩波新書、一九四二)
中野孝次『清貧の思想』(草思社、一九九二)

第四章
坂井信生『アーミッシュ研究』(教文館、一九七七)
濱田政二郎『ユートピアとアメリカ文学』(研究社、一九七三)
Robert D. Richardson Jr., *Henry Thoreau : A Life of the Mind* (University of California Press, 1986)
Clara Endicott Sears, *Bronson Alcott's Fruitlands* (Porcupine Press, 1975)
Henry David Thoreau, "Paradise (To Be) Regained" in *Reform Papers* (Princeton University Press, 1973)
大津山国夫編『新しき村の創造』(富山房、一九七七)
B. F. Skinner, *Walden Two* (Macmillan, 1948)
J・C・ガレット著武田光史訳・著『文学とユートピア』(弓書房、一九八二)
ジャック・ウェストビー著熊崎実訳『森と人間の歴史』(築地書館、一九九〇)
George Perkins Marsh, *Man and Nature* (Belknap Press, 1965)
高坂正堯『文明が衰亡するとき』(新潮社、一九八一)
神坂次郎『縛られた巨人――南方熊楠の生涯』(新潮社、一九八七)
中沢新一『南方熊楠コレクション・第五巻・森の思想』(河出書房新社、一九九二)
後藤允『尾瀬――山小屋三代の記』(岩波新書、一九八四)
Kenneth Walter Cameron, "The Disciple at Walden" (*ESQ*, 26, 1962)
Richard F. Fleck, *Henry Thoreau and John Muir : Among the Indians* (Archon Books, 1985)
岡島成行『アメリカの環境保護運動』(岩波新書、一九九〇)
Lawrence Buell, "The Thoreauvian Pilgrimage : The Structure of an American Cult" (*AL*, 61, 1989)
Vena & Bradford Angier, *At Home in the Woods : Living the Life of Thoreau Today* (Collier Books, 1971)
リンドバーグ夫人著吉田健一訳『海からの贈物』(新潮文庫、一九六七)
David Kirk Vaughan, *Anne Morrow Lindbergh* (Twayne, 1988)
ピル・マッキベン著鈴木主税訳『自然の終焉』(河出書房新社、一九九〇)
Gary Snyder, *The Practice of the Wild* (North Point Press, 1990)

(平成四年九月二十八日受理)
(平成四年十二月二十八日発行)